『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その六

―エレウシース―

高橋克己
（人文学部独文研究室）

内容梗概

〔一〕 序　論　二(156)頁―五(159)頁
〔二〕 宥和の旋律　六(160)頁―七(161)頁
(1) 頭韻と詩脚　八(162)頁―一一(165)頁
(2) 内省する魂　一一(165)頁―一五(169)頁
(3) 生ける静謐
〔三〕 燈火と松明　〔第34巻〕
(1) 生成と消滅　一六(170)頁―一七(171)頁
(2) 燈火と月影　一七(171)頁―二二(176)頁
(3) 発酵と解体　二二(176)頁―二八(182)頁
〔四〕 思慮深い家長　〔第38巻その二〕
(1) 緒　言　三〇(44)頁―三一(45)頁
(2) 親友ランダウエル　三一(45)頁―三六(50)頁
(3) ランダウエル絨毯毛織物商会　三六(50)頁―三九(53)頁
(4) 共和精神と専制　四〇(54)頁―四三(57)頁
LANDAUER―„ein sinniges Haupt“ in Hölderlins „Brod und Wein“
〔第38巻その二〕　(83)頁―(90)頁
〔五〕 黄昏から聖夜へ
(1) 離　在　〔第36巻〕　四四(15)頁―五〇(21)頁
(2) 噴　泉　五〇(21)頁―五六(27)頁
(3) 晩鐘と時禱　〔第37巻〕　五七(2)頁―六三(8)頁
(4) 林苑と盟約　〔第38巻その二〕　六四(92)頁―九五(123)頁
(5) エレウシース　〔第39巻〕
本論要旨（約八〇〇字）　九六(2)頁
〔a〕「悲愴かつ壮麗」　九七(3)頁―九七(3)頁
〔b〕「神の国」　九七(3)頁―九九(5)頁
〔c〕「月夜」　九九(5)頁―一〇〇(6)頁
〔d〕「星辰」　一〇〇(6)頁―一〇一(7)頁
〔e〕「理想と人生」　一〇一(7)頁―一〇三(9)頁
〔f〕「聖夜」　一〇三(9)頁―一〇三(9)頁
〔g〕「探求」と「吟味」　一〇三(9)頁―一〇四(10)頁
〔h〕「直観（ロマン）」と「探求」　一〇四(10)頁―一〇七(13)頁
〔i〕「浪漫化（ロマンティス）」　一〇七(13)頁―一〇九(15)頁
〔j〕「人倫」　一〇九(15)頁―一一四(20)頁
和文註解　(21)頁―(28)頁
欧文註解（Quellennachweis）　(29)頁―(48)頁
Zusammenfassung/Sommaire/Abstract　(49)頁―(52)頁
Inhalt/Table des matières/Contents　(53)頁―(54)頁
〔六〕 結論―啓蒙期より十九世紀へ　後日刊行予定
(1)〜(8)

※既刊部（〔一〕〜〔四〕および〔五〕(1)〜(4)は、高知大学学術研究報告、人文科学編、第三四巻（一九八五年度）／第三六巻（一九八七年度）／第三七巻（一九八八年度）／第三八巻（一九八九年度）その一（特輯号）に掲載されている。

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」

〔五〕黄昏から聖夜へ

(5)　エレウシース

高橋克己

一　静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともり、
二　して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。
三　満ち足りて家路へと、昼間の歓びに別れを告げ、安らぎを求め歩みゆく
　　人々。
四　して収支得失を慮る思慮深い家長は
五　悠然と和やかにわが家にくつろぐ。（黄昏の今は）葡萄も花束もなく、
六　して手仕事の品々もなく安らう、（昼間は）忙しき広場の市場。
七　だが他方、竪琴の音が彼方の庭園から響いて来る。恐らくは
八　そこで恋人が奏で、或いは孤独な者が
九　彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が
一〇　滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ迸り、芳香に匂う花壇を霑してい
　　る。
一一　ひそやかに黄昏の夜気に響き渡る晩鐘の音
一二　して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばわる。
一三　今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を（天上へと）揺り動かす。
一四　見よ！　して我らの大地の影像たる月も
一五　また秘蔵の荘厳より解き放たれ、霊気溢れる夜が到来する。
一六　星辰に輝きみち（清澄な）夜は、恐らく私達などまず配慮もせず。
一七　彼方で光明を放ち、驚嘆させ、人間では異邦の者として
一八　山頂の上高く、悲愴かつ壮麗に立ち現われる。

（『パンとぶどう酒』一八〇〇年―〇一年、第一節、第一句―第十八句）

本論要旨

『パンとぶどう酒』第一節がノヴァーリスの『夜の讃歌』に通じる「聖なる夜」として、詩歌象徴の根源より「浪漫化（Romantisieren）」され万象が照らし出されていることは確かである。しかしながら此所では同時に「聖夜」が、聖域での密儀の如き秘蔵の荘厳より解き放たれ、然り気なく何時とはなしに市民生活の日常に「隠れて働きかけている」と言え、この聖化された都市像を解く鍵となるのが「月影」である。即ち冒頭の第一句には一見したところ「燈火」のみが目に留まるが、実は「密やかに街路に（燈火と月影の）光が満ちる」と読む方が正鵠を射ており、この故にこそ第十四句以下で「月もまた秘蔵の荘厳より解き放たれ（der Mond／Kommet geheim nun auch）、霊気溢れる夜が到来する」ことになるのである。

こう見てくると『パンとぶどう酒』第一節の詩想は、「分別知」を越えた「美の直観」つまり「叡知直観の客観化」として浪漫風の無限への憧憬を掻き立てるに留まらず、歴史上の現実に根ざした「意識の公道」をも歩み、「エレウシース祝祭」を人倫の顕在化と解したシラーの説くように、「人倫の太陽の軌道の中へと深沈してゆく」ことにもなる。つまり『パンとぶどう酒』の都市像は一重に彼方より光明を獲て霊妙幽玄となるのみならず、他方で史実に適う「人倫の偉容」をも形造り、この詩歌の第一節は「浪漫化」する「夜の讃歌」であると共に、また啓蒙と革命の時代を映す「市民の歌」とも看做されるのである。

翻って研究史を振り返るに、十九世紀以来多分に浪漫風色彩を帯びた在来のヘルダーリン解釈は、『パンとぶどう酒』が啓蒙期十八世紀の教訓詩や思想詩の成果を継承した経緯を見過してきた。今後は決して「浪漫詩文の傍系」へと片付けられぬよう、「啓蒙」の筋への目配りを忘れず、話題の「聖なる夜」の考察に際してと同様に、就くシラー抒情詩の雄篇に彫り刻まれた「人倫（Sittlichkeit）」など基本問題の一層の展開としても当作品を読解すべき要請が残されているのである。

(5) エレウシース

(a) 「悲愴かつ壮麗」

おお、人間よ！　耳を澄ませ！
深い真夜中は何をか語る？
「わたしは眠った、わたしは眠った――、
「深い夢からわたしは目覚めた。――
「世界は深い、
「昼が考えたよりも深い。
「世界の悲しみは深い――、
「だが歓びは――悲哀よりも深い。
「悲しみは言う。《過ぎ去れ！》と。
「しかしすべての歓びは、永遠を欲する――、
「――深い深い永遠を！(1)」
（ニーチェ『ツァラトゥストラはこう語った』第四部、一八八五年）

これから『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」全十八句の終結部（第十四句―第十八句）の考察に向かうにあたり、この第一節の基本性格に留意しておきたい。それを一言で以って蔽えば、「悲愴かつ壮麗に(traurig und prächtig)(2)」（第十八句）と、当詩節の結句の表現で示すことができる。これは即ち悲壮（パトス）美を指しており、右に引いた『ツァラトゥストラ』の一節を第四楽章にて歌い上げ、その後に抒情性豊かな終楽章へと滔々と流れゆく、マーラーの第三交響曲に通ずる響きにおいて聴き取られる基調（グルントトン）(Grundton)と言えよう。

ところで『パンとぶどう酒』第一節の詩想は、とかく「時の分断性や無常性(万物流転、諸行無常)(3)」の相の下にある「崇高な精神的瞑想(4)」と看做され易く、事実この種の解釈に礎を与える浪漫風の「無限への憧憬(5)」が、当の詩想展開に孕まれていないわけではない。しかしながら、これは『パンとぶどう酒』の悲壮美の側面に過ぎず、全体として「悲愴かつ壮麗に」と正面から歌い上げられた基本性格を尽くすものではないと考えられる。

なぜなら遁世の方向で摑まれ、心情の内面へと閉じゆく「霊感(Begeisterung)(6)」を事とする浪漫風解釈には、更にそれを一層と深める「空無を孕む内面の飛翔(7)」も萌えず、また『パンとぶどう酒』冒頭の都市像に兆した歴史的現実への壮観も開かれないからである(8)。逆に西欧キリスト者の既成意識が、目下の歴史的現実を空想で偽らず「乏しき時代(9)」（第七節、第一二二句）と見据えつつも、尚この苛酷な史実にさえ何処かで「至福なるギリシア(10)」へと兆す契機を、倦むことなく問い求めつつ「至福」の彼方へ無限に理念追求してゆく。此所で意識の現実は、空無を孕み既成の殻を突き破る悲壮美を帯び、濃淡細やかな詩想を展開する。この詩想展開の予兆として、『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」は、文字通り「悲愴かつ壮麗に」たち現われる。

引用した『ツァラトゥストラ』の一節の言葉を援用すれば、諸行無常を説く遁世風の「悲しみは言う。《過ぎ去れ！》と」、つまり厭離穢土して想像の翼に乗り「霊感」の力で「至福なるギリシア」へ飛翔せよと説く。だが『省察』でヘルダーリンは、これを「高みへと落ち込む(11)」と自戒する。そこで中観を目指し「至福」が空無を孕めば、「すべての歓びは、永遠を欲する――、――深い深い永遠を！」とニーチェ風に言うに恥じぬ詩想が萌える。蓋し「永遠」とは此所で、一重に彼岸のみにあらぬ此岸の問題でもあり、『パンとぶどう酒』では就く個別霊魂の不滅を問わざるを得ない。つまりドイツ精神とでも言える特殊な歴史的現実が「永遠を欲する――、――深い深い永遠を！」と読めるのである。

(b) 「神の国」

昔日ヘーゲルたちと共に若きヘルダーリンは、『新約聖書』の神観を踏

まえた救済史の展望の下に、「合言葉――神の国（Reich Gottes）」で以て、「深い深い永遠」を望んでいた。

僕たちが神の国という合言葉を交して別れて以来、折に触れ君が僕のことを想い出してくれたと僕は確信している(12)。

（一七九四年七月一〇日ヘーゲル宛）

更にヘルダーリンは続けて言う。「各人がどんなに変わろうとも、確かにこの合言葉で僕たちはお互いを認め合えることだろう(13)」。この「合言葉」は翌一七九五年一月にシェリングに宛てたヘーゲルの書簡において、ヘルダーリンの言葉として「神の国が来る。僕らは無為に手を拱いていてはいけない！(14)」と表現される。

「神の国が来る」とは決して浪漫風遁世を意味せず、むしろ「深い深い永遠」が現実となることを志向しており、目下フランス革命勃発（一七八九年七月）以降の史実と並んで、カント哲学と古典ギリシアが話題となる。

僕は目下かなり集中して仕事をしている。カントとギリシア人達が唯一とも言える僕の読書なのだ。殊に批判哲学の美学方面に造詣を深めようと僕は努めている(15)。

右一七九四年七月一〇日ヘーゲル宛書簡で既にヘルダーリンは精魂傾ける対象をこう描いている。かつて『新約聖書』の『マルコ福音書』では、「時（カイロス）（ὁ καιρός）が満ち、神の国（ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ）が近付いた。回向（メタノイア）し福音を信ぜよ(16)」（第一章、第一五節）と説かれた。今や『パンとぶどう酒』では、古典ギリシアの福音が啓蒙と革命の時代に高鳴り、西欧キリスト者の既成意識に向かい、「至福なるギリシア」へと「回向（メタノイア）し（美の）福音を信ぜよ」と呼び覚ます。

それ迄の学知に対するカント批判哲学の優位と、革命下での旧体制崩壊と共和国樹立（一七九二年九月）は、「時（カイロス）が満ち、神の国が近付いたことを告げている。この背景を抜きにして『パンとぶどう酒』の詩想を、それ自体完結した言語芸術作品として読む文学研究の趨勢は(17)、恐らく木を見て森を見ずの観を免れ難いであろう。故に本論としては、この第一節「聖なる夜」の終結部を考察するに際して、予め先行する詩節（第一句―第十三句）を、話題の「深い深い永遠を欲する」「神の国」との関連で振り返っておきたい。

静かに安らう都市。ひそやかに街路には（燈火（ともしび）と月影の）光が満ち、
　して松明に飾られて、騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。
満ち足りて家路へと、昼間の歓びに別れを告げ、安らぎを求め歩みゆく人々。
　して収支得失を慮（おもんぱか）る思慮深い家長は
悠然と和やかにわが家にくつろぐ。（黄昏の今は）葡萄も花束もなく、
　して手仕事の品々もなく安らう、（昼間は）忙しき広場の市場。
だが他方、竪琴の音（ね）が彼方の庭園から響いてくる。恐らくは
　そこで恋人（エロース）が奏で、或いは孤独な者が
彼方の友を思いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉（プルネン）が
　滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ迸り、芳香に匂う花壇を霑（うるお）して
　いる。
ひそやかに黄昏の夜気に響き渡たる晩鐘（おと）の音。
　して時刻（とき）を想い、その数を夜警は声高（こわだか）に呼ばわる。
今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を（天上へと）揺り動かす(18)。

（『パンとぶどう酒』一八〇〇年―〇一年、第一節、第一句―第一三句）

冒頭六句で文字通り「安らぐ（：ruhet：ruhen：ruht：）」（第一句、第三句、第六句）のは、単に外界の都市像のみならず、実は同時に「深い深い永遠」を望む心でもあり、何時（いつ）とはなしに魂の願いは「神自身」たる「安らぎ(19)」を目指している。蓋し契機は遁世になく、現世の日常性に根ざした謹厳な市民意識に宿り、「神の国」は彼岸ならぬ此岸の現実の問題となる。

文字通り「過ぎ去る（hinweg）」（第二句）のは、「松明に飾られて」、宮廷オペラ文化の夜会を目指す門閥の「馬車」であり、これが第二句で「騒然と疾駆し過ぎ去る」と歌われ、これとの明暗の下に都市民の生活圏には「ひそやかに（燈火と月影の）光が満ち」（第一句）る。すなわち夜闇の遊興へと疾走せず、「悠然と和やかにわが家にくつろぐ」（第五句）と高唱されて、市民生活の日常が光明に満たされる。引き続く「噴泉」（第九句）を始め、「晩鐘」（第十一句）や「息吹き」（第十三句）により形造られる音響の世界も、この現実の聖化を一層と際立たせる契機であり、言わば「音楽の精髄(20)」から「魂の歌声(21)」が響く近世ドイツ市民意識において、「深い深い永遠」を求め「至福なるギリシア」への巨歩が踏み出されんとしている。此所において『パンとぶどう酒』では、「月」（第一四句）と「星辰」（第十六句）の光明に充ちて、「霊気溢れる夜（die Nacht）」（第十五句）が登場するのである。

〔C〕「月夜」

Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond
一五 Kommet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht kommt,
Voll mit Sternen und wohl wenig bekümmert um uns,
Glänzt die Erstaunende dort, die Fremdlingin unter den Menschen
Über Gebirgeshöhn traurig und prächtig herauf.

見よ！　して我らの大地の影像たる月も
一五 また秘蔵の荘厳より解き放たれ、霊気溢れる夜が到来する。
星辰に輝きみち（清澄な）夜は、恐らく私達などまず配慮もせず、
彼方で光明を放ち、驚嘆させ、人間では異邦の者として
山頂の上高く、悲愴かつ壮麗に立ち現われる(22)。
（『パンとぶどう酒』第一節、第一四句―第一八句）

大自然の月影は実は既に第一句で街路の燈火と共に歌われていたと考えられる。つまり「ひそやかに街路には（燈火と月影の）光が満ち（still wird die erleuchtete Gasse）」（註(18)）と第一句後半が読めるからである。それとはなく目立たずにいた月影が、第十四句で直接名指しされ、第十五句で「霊気溢れる夜」とともに現われて、正に今や月夜が確認される。

此所で神話象徴の知識の豊かな読者は、「月」や「夜」をめぐり様々な連想を逞しくするかも知れない。だが古代ギリシア神話や『聖書』に関する事典類に詳細に記載されている情報は目下控えた方が賢明であろう。なぜなら第十三句まで着実な足取りで歌い上げられた市民生活の日常から急に逸脱して、空想と博識なす非現実へと向かうことは唐突の感を免れ難いからである。むしろ自然科学の成果の方を此所では留意すべきであろう。すなわち今日なら一般化した認識、月が地球の囲りを回り、月影は地球から見える日光の残影に過ぎないことを踏まえれば、第十四句で「我らの大地の影像」とされる「月」が理解し易くなる。文脈では一度この様に控え目に把えられた「月」が、引き続く第十五句で「秘蔵の荘厳より解き放たれ」ることになる。

「月」の霊妙さは、古来の神話象徴から取られた説明に依存せず、むしろ目下の都市像に根を張っている。つまり『パンとぶどう酒』冒頭から既に月影は光明を人間に投げかけており、その光の下に万象が生気を獲得している。「孤独な者」（第八句）の心も月影の下に映え、「滔々と湧く噴泉」（第九句以下）の清冽な水しぶきも、月の光に照らされ息吹く。その他の形象も全て「月」を抜きにしたならば色褪せるであろう。第十四句で直接に語られる以前に、それとなく「月」の霊妙さは日常の都市像に大きな影を投げかけている。従って第十五句で「秘蔵の荘厳より解き放たれ」と歌われるのは、これまで既に歌われた詩歌象徴の中で「月」の果たしている甚大な働きの確認を意味しているのである。

この様に形而上の神話風文飾を慎しみ、形而下の現実を踏まえながら、何時とはなしに気付かぬうちに日常経験の次元に留まらぬ霊域へと開か

れてゆく。『パンとぶどう酒』第一節の「夜」が第十五句で「霊気溢れる」と言われるゆえんもここにあり、既に確認した「我らの大地の影像」に過ぎない「月」（第十四句）がこれを象徴している。この様に詩想が、「高みへと落ち込む」（註(11)）「霊感」（註(6)）を控えるのは、丁度カント批判哲学にて、「可能な経験全体を鑑みるならば高邁（überfliegend）」と映る「理念（イデー）の使用[23]」を慎しむのに似ている。

但し『純粋理性批判』も認めている通り、「可能な経験の領域を越え」て「この限界を踏み出す自然な傾向を人間理性が有している[24]」ことも否定できない。故に、「人間理性」の「格別な運命」は、「拒否でき得ない（形而上の）様々な問い（Fragen）に悩まされる[25]」ことにある。同様に『パンとぶどう酒』の場合も、詩歌象徴は目先の「可能な経験の領域を越え」て、何時とはなしに人間存在の根源へと問いを向ける。前述の如く冒頭の都市像に宿る「安らぎ」が竟には心の究極の平安を目指すように、「孤独」（第八句）とても心理情緒の断面を切開するよりは、むしろ「純粋な離在[26]」の遙か彼方へと放下（ほうげ）された魂に根を張る。かく祈りの空無へと開かれた詩想においてこそ、「噴泉が滔々と湧き」（第九句以下）、「晩鐘の音」（第十一句）や「夜警の声」（第十二句）が反響し、「ある息吹きが（天上へと）揺り動かす」（第十三句）のであり、「月もまた秘蔵の荘厳より解き放たれ」（第十四句以下）、「霊気溢れる夜が到来する」（第十五句）のである。故に『パンとぶどう酒』第一節の「月」と「夜」は、日常意識の現実から離れ反れて空想と熱狂へと天翔る心情を惹起すると言うよりは、むしろ地道に眼前の経験を心の奥底へと深めつつ、「深い深い永遠」を望む「魂の歌声」に協和してゆく詩歌象徴と看做されるのである。

〔d〕「星辰」

一九五　恐らく私達の世界（この地球は）、一粒の砂のごとく
　　天空の大海原に漂う、悪の祖国なのだ！
　　星辰は恐らく光明に変容した諸霊の住居（すまい）であり
　　この世で悪徳が支配するように、かしこでは有徳が君臨しているのだ。
　　そして卓越性少なき、宇宙の当地点（この地球）は（但し）
二〇〇　大いなる万有の中では、（何らかの）完璧さに役立っているのだ[27]。
　　（ハラー『悪の根源について』第三書、第一九五句―第二〇〇句）

「悪の祖国（des Übels Vataterland）」たる現実が「（何らかの）完璧さ（Vollkommenheit）に役立っている」と言われる筋は、『パンとぶどう酒』の第三部の言葉で「乏しき時代（dürftige Zeit）」（註(9)）にある詩人の祖国ドイツが、同時に「（古典ギリシア文化の聖火を宿す）西欧の果実（Frucht von Hesperien）[28]」（第九節、第一五〇句）と摑み直される件（くだり）に呼応する。詩想はハラーの場合、啓蒙理性の一般普遍性に留まっているのに対し、ヘルダーリンにおいては歴史意識の内なる宇宙空間を「至福なるギリシア」（註(10)）へと遡求する。悠久なる彼方の「星辰」の世界、つまり「光明に変容した諸霊の住居（ein Sitz verklärter Geister）」は、内観に宿る魂の古里たる「あらゆる神々の住居（Haus der Himmlischen alle）[29]」、すなわち「至福なるギリシア」と反響し合うことになる。

この様に『パンとぶどう酒』第一節の「星辰に輝きみち（清澄な）夜」（註(22)）は、後の「至福なるギリシア」における「清澄なる（heiter）大気[30]」（第六四句）と呼応し、「西欧の夜」と「ギリシアの昼」との明暗が見事に形造られる。「夜」に「月影」が輝くように、「昼」には丁度ポイボス神アポローンの如き太陽が燃える。『パンとぶどう酒』第四節における讃歌燃焼の只中で召喚されるのは、この太陽の神アポローンが君臨する悲劇祝祭の時空であり、就くポイボス神に撃たれたオイディプースの雄姿が言わば「星辰」の如く輝く。即ち灼熱の日輪にも紛う神に射られ、悲雄の心が暗闇に覆われるや、正にこの魂の夜へと西欧意識は親和するのである。

蓋し群雲の闇夜は、彼方の「清澄なる大気から雷鳴とともに、眼界を過り突入して来る偉大なる運命（das große Geschik）」（註(30)）を浮き彫りにし、この「偉大なる運命」が西欧キリスト者の神観にも恥じぬ「清澄なる神気（アイテール）」（註(30)）の座ギリシアの象徴として召喚されていると言えよう。この様な心意識の内外における呼応関係は未だ『パンとぶどう酒』第一節のみからは解からない。しかしながら前述の大筋を留意しないで、「夜」の神話がどうのこうのと言ってみた所で[31]、詩想の核心に迫れるわけではなかろう。従って第一節「聖なる夜」が、第四節「至福なるギリシア」へと詩想展開する母胎に他ならない点を、此所ではまず忘れないようにしておきたい。

ところで右引用のハラーの詩歌『悪の根源について』（一七三四年）第三書の第一九七句と第一九八句は、カントの著書『天界の一般自然史と理論』（一七五五年）第三部「星辰の住民について[32]」においても話題とされている箇所で、『パンとぶどう酒』（一八〇〇年―〇一年）成立の背景にある啓蒙十八世紀の神観を伺わせる。つまり当時はなお絶対空間とか絶対時間が話題にされるほど精緻な数学秩序を範型として宇宙が考察されており[33]、恒常なる「星辰」の形造る「天界の諧音（Sphärenmusik）[34]」が「有徳」（註(27)）と響き合ったのである。

二つのことが心情を恒に弥増す新たな驚嘆と畏敬でみたす。一層と度重ね心こめて思案をめぐらせばめぐらす程。それはわが頭上に輝く星辰の天界（der bestirnte Himmel über mir）と、わが内なる道徳律（das moralische Gesetz in mir）である[35]。

（カント『実践理性批判』一七八八年、結語）

先に「神の国」（註(12)）との関連で話題とした「カントとギリシア人達」（註(15)）が、目下の「星辰」と深く係わる。後者ギリシア人達の場合は、就く前述の「偉大なる運命」（註(30)）の方が本筋であって、数学秩序なす「天界の諧音」（註(34)）の方はむしろ表層に過ぎないと言える。

同様にカント批判哲学においても、重心はむしろ「わが内なる道徳律」に懸かっていると考えられる。なぜなら実は内観がなければ、「わが頭上に輝く星辰の天界」は映じないと言うのが批判哲学の説く所だからである。もはや絶対の実在が、唯一神にせよ空間時間にせよ、自明の公理として立てられるかわりに、実存の課題として「人間とは何者なのか？（Was ist der Mensch?）」がむしろ問われるのである。

すなわち私は見よう天空を　…　月影そして星辰を　…
人間とは何者なのか　…　して人の子とは　…[36]

（『詩篇』第八歌、第三節―第四節）

『パンとぶどう酒』第十六句において、「星辰に輝きみち（清澄な）夜は、恐らく私達などまず配慮もせず（wohl wenig bekümmert um uns）」（註(22)）と歌われている。詩句の文字通り「配慮（Bekümmern）」、或いは「憂慮（Sorge）」が問われており、当然この裏で「人間とは何者なのか？」が留意されていると読み取れる。此所では「星辰」の「夜」そのものが如何なるものかを表現することは二の次と思われ、まずは「人間」にとり「星辰の夜」が、「彼方で光明を放ち、驚嘆させ、人間（じんかん）では異邦の者として山頂の上高く、悲愴かつ壮麗に立ち現われる」（註(22)）ことが肝要と考えられるのである。

(e) 「理想と人生」

彼方に輝く天界が「私達などまず配慮もせず」（註(22)）に悠然としている姿は、ヘルダーリンの『ヒュペーリオン』第二巻（一七九九年）第二書の第二八書簡に収められた『ヒュペーリオンの運命の歌』が良く物語っている。即ち「あたかも寝入る乳呑児の如く、運命（の重圧）なく神々は息吹き（Schiksaalos, wie der schlafende / Säugling, athmen die Himmlischen ;）、…　してその至福なる眼（まなこ）は眺める（Und die seeligen

Augen / Blicken）静かな永遠の清澄さにて（in stiller / Ewiger Klarheit.）[37]」（第七句―第一五句）と歌われている通りであり、この種の典雅沈静なる天空ギリシア神話世界の理念が、ヴィンケルマン著『絵画と彫刻における古代ギリシア芸術作品模倣論』（一七五五年）に表明された「高貴な純朴と静かな偉容（Die edle Einfalt und stille Größe …）…[38]」に淵源を有していることも確かである。

「そして、ヴィンケルマン氏のごとき人物が歴史の炬火をかかげるとき、思索はそのあとに従って思いきった歩みを進めることができる[39]」と、レッシングが『ラオコオン』（一七六六年）第二六章で古典ギリシアの福音を唱導し、引き続きゲーテの『イフィゲーニエ』（一七八七年）やシラーの『ギリシアの神々』（一七八八年）がこれに唱和した。ヘルダーリンの眼前には、これら新たな福音の使徒たちの業績が横たわっており、引用した『ヒュペーリオンの運命の歌』こそ先人の足跡に従った証左に他ならないと考えられる。孰れにおいても天界ギリシアへの止み難い言わば無限の憧憬が基調となっていると同時に、天界は「静かな永遠の清澄さ」（註(37)）を湛え、その様は『パンとぶどう酒』第十六句の「星辰に輝きみち（清澄な）夜」に似て、「私達などまず配慮もせず」（註(22)）に彼方で安らっている観を呈している。

後に『理想と人生』（一八〇四年）と題されたシラーの詩歌『幽魂の国』（一七九五年）の冒頭で「永遠に清澄にして明鏡の如く（Ewig klar und spiegelrein …）…[40]」と歌われたオリュムポスの神界こそ、「私たちなどまず配慮もせず」にいる天界の代表例として、話題の『ヒュペーリオンの運命の歌』第七句以下（註(37)）にとり第一の範例と考えられる。即ち『運命の歌』も『理想と人生』も主眼は同様に、遥か彼方の天界よりはむしろ「運命」の重圧の下にある「人生」の側にあり、天界の悠然とした特性はそこから見た「理想」に過ぎないからである。

このことは各詩歌の詩句そのものが語る所であり、印象深い『運命の歌』の結びの部分、「だが私達に叶えられしは（Doch uns ist gegeben,）、何処にも安らわぬこと（Auf keiner Stätte zu ruhn.）。消えゆき落ちゆく（Es schwinden, es fallen）、苦悩する人間は（Die leidenden Menschen）、盲目に或る（Blindings von einer）時より別の（時）へと（Stunde zur andern,）、谷川が岩壁より（Wie Wasser von Klippe）また岩壁へと投げ出される如く（Zu Klippe geworfen,）、幾年も空漠の彼方へと（Jahr lang ins Ungewisse hinab.）[41]」（第一六句―第二四句）と並び、『理想と人生』中央部の最高潮（第八節、第七七句―第八〇句）が、読者の脳裏には他の箇所にまして印象深く刻まれることになる。

如何なる労苦をも恐れぬ真摯に対してのみ
滔々と真理の深く隠された泉が溢れ、
鑿刃の重々しい打撃にのみ応えて怯むのだ、
大理石の粗い岩肌も[42]。

典雅沈静なる「理想」の天界オリュムポスが如何に魅力ある「幽魂の国」であろうとも、所詮は「現世の重き幻像（des Erdenlebens / Schweres Traumbild）[43]」に比べれば、重量感の薄い影の如き存在として映ぜざるを得ず、彼方に漂う「理想」の天界はこの場合「人生」の現実の側から彩られてゆくと解される。

『パンとぶどう酒』第一節の「星辰に輝きみち（清澄な）夜」も、一面ではこの種の「理想」として、「人生」の側から見ると「私達などまず配慮もせず」（第十六句）と言った所である。但し当詩句の仏訳「われらの人生には全く無関心で（tout indifférente à notre vie）[44]」（ルー訳）は、余りにこの面を強調し過ぎている。あくまで原典は「まず配慮もせず（wohl wenig bekümmert）」（註(22)）とあり、決して「夜」は「われらの人生に全く無関心で」はない。むしろ「夜」は『パンとぶどう酒』において何時とはなしに深く現実の生に係わっている。このことは既に述べた通り、冒頭の第一句よりして「月影」（註(18)）の光明が目立たず

市民生活を抱擁している点に読み取れる。従って「夜」は第十七句の文字通り、大抵は察せられることなき「異邦の者（Frendlingin）」なのであるけれども、全く無縁で超然とした至高存在とは解され得ず、むしろ目立たずそれとなく現実の生に深く影を投げかけている故にこそ、「霊気溢れ（Schwärmerische）」（第十五句）「驚嘆させ（Erstaunende）」（第十七句）ると歌われ得るのである。

〔f〕「聖夜」

『パンとぶどう酒』の「夜」が神聖であるのは、現世離れした摩訶不思議においてではなく、日常の現実に対し見事に「隠れて働きかけている（Verborgenwirkend）(45)」と言える幽玄霊妙においてと考えられる。そしてこの「隠れて働きかけている」と言う点において、「夜」は、『パンとぶどう酒』の詩想の核心キリスト像に繋がりゆく。なぜなら当キリスト像こそ、燦然と日輪が輝く「至福なるギリシア」（註(29)）の夕暮において、ほの白く碧空に点る月影に似て、何時とはなしに現われるからである。

それは『パンとぶどう酒』中央部（第二部）で、第五五句より第一〇六句にかけ悲劇の誕生する「至福なるギリシア」が滔々と歌われた後に、言わば付け足しの如く中央部終結なす僅か二句（第一〇七句―第一〇八句）で、直接名指しされることなく幽かに玄く問われていると読める。

Oder er kam auch selbst …

…

或いはもしかすると神自身もまた来臨し、しかも人の姿をとり、
そして天上の祝祭を終結し宥和したのだ(46)。

（『パンとぶどう酒』第六節終結部）

「至福なるギリシア」の悲劇祝祭は「神々」ならぬ「神自身」により「終結し宥和」される。その「神自身」は昼間の碧空に点る月影の慎ましさを有し、幽かに玄く代名詞一語一音（er）の中で「隠れて働きかけている」のである(47)。

更に第三部（終結部）の第八節に至ると、この幽玄なる神自身が「静かな霊（ゲーニウス）（ein stiller Genius）」（第一二九句）として、「現われ（erschienen）」（同句）かつ「消えた（schwand）」（第一三〇句）と歌われ、有無の両義性を孕んだ濃淡細やかな詩歌象徴となる。この場合もまた「（ギリシアの）昼の終結を告げた」（第一三〇句）として、神自身キリストは夕暮の情緒に宿る月影を想わせる。

竟に静かな霊が現われ、神々しい
安らぎを与え、昼の終結を告げ消えた(48)。

（『パンとぶどう酒』第一二九句―第一三〇句）

後にこの様に歌われてゆく幽玄な神自身キリスト誕生の母胎として、『パンとぶどう酒』第一節の「夜」は、霊妙な聖夜となる。双方の本質は今迄見た通り、「隠れて働きかけている」と言う点にあり、この点において第一節の「夜」は、第六節や第八節のキリスト像の予兆となっている。素朴な習俗においても「聖夜」は、神自身キリスト誕生の追憶にと祝われている。この追憶は西欧キリスト者にとり親しみ深い想い出であり、詩人は『パンとぶどう酒』の眼目キリストをこれにて一層と期待させつつ、その神自身来臨の本意を何時とはなしに真摯に問わしめるのである。

〔g〕「探求」と「吟味」

神自身来臨の真意は一つに、既に述べた『新約聖書』のキリストの言葉、「時（カイロス）が満ち、神の国が近付いた。回向（メタノイア）し福音を信ぜよ」（註(16)）に表明されている。これは『パンとぶどう酒』の場合、神自身キリストが「終結し宥和」（註(46)）した「至福なるギリシア」を目指し理念追求することを意味している。だが第一節においては未だ理念追求すべき方向

が明示されていない。但し何かしら「神の国が近付いた」ことのみは、「月影」と「星辰」の聖夜により、それとなく予感（Ahnung）される。

Noch ahnd' ich, ohne zu finden. ……

なお私は予感し続けている、未だ見い出すことなく。私が問い尋ねようとも、星辰（Sterne）は黙している。…

蓋しそれは解明されねばならない、かの偉大なる神秘（das große Geheimniß）は。そして、それが私に生あるいは死を与えるのだ(49)。

（『ヒュペーリオン』タリーア断片、一七九四年）

「生あるいは死を与える」と言える究極は、「至福（Seligkeit）」への問いとして立てられ、『パンとぶどう酒』では古典ギリシアに「偉大なる神秘」が探し求められる。これに先だちその第一節「聖なる夜」においては、「至福なるギリシア」（第四節）への地ならしが整えられ、市民生活の日常が此所では光明にみたされ聖化される。この詩想展開において「至福」を問う読者は何時とはなしに、「拒否でき得ない（形而上の）様々な問いに悩まされる」（註(25)）ことになるのである。

一つの問いが浮上する。この光明で聖化された時空も果敢無く消え去りゆくに過ぎぬものであろうか？　或いは目下歌われた特殊な十八世紀末ドイツの現実こそ、或る普遍性を獲ているのではなかろうか？　もしそうならば、この「聖夜」に敢てドイツ精神と言い得る不滅の証が宿り、この光明の下に恐らく魂の不滅が期待されるであろう。ならば「神の国が近付いた」のであるから、何処へ心を「回向」して、何処に魂の古里を探し「至福」を求めたら良いのであろうか？　かくして「至福なるギリシア」は何時とはなしに問われてゆく。

『パンとぶどう酒』第一節の「聖夜」は、この様に探し求め問う点に特色を有する。

探し求めよ（Suchet）、ならば汝らは見い出すであろう。…(50)

（『マタイ福音書』第七章、第七節）

後に「至福なるギリシア」のキリスト像が歌い出されてから、『パンとぶどう酒』終結第九節では「信ぜよ（Glaube）、吟味せし者は（wer es geprüft!）！(51)」（第一五二句）と語られる。かくして「探求」と「吟味」の過程として、『パンとぶどう酒』は正に思想詩（Gedankenlyrik）と呼ばれるに相応しい「魂の歌声」（註(21)）となる。

「信ぜよ！」（註(51)）とは、「至福なるギリシア」の「福音を信ぜよ」（註(16)）と言うことであるが、この意味する所は、「（古典ギリシア文化の聖火を宿す）西欧の果実」（註(28)）たる歴史的現実ドイツ精神が「永遠を欲する――、――深い深い永遠を！」（註(1)）と解される。つまり「魂の歌声」として思想詩『パンとぶどう酒』が誕生したことは無駄ではなかったか否か？　と全詩篇を通じて「探求」され「吟味」されており、今や目下話題の第一節「聖なる夜」において、「探求」の第一歩が踏み出されたと言える。此所で「深い深い永遠」を望む心は、何時しか魂の不滅を問い求める「無限への憧憬」（註(5)）に駆られつつも、この心根を「吟味」し「探求」し、竟には魂の古里ギリシアへと西欧キリスト者の既成意識を越えいでてゆくのである。

〔h〕「直観」と「探求」

ところで『パンとぶどう酒』における「探求」と「吟味」は、『純粋理性批判』（初版一七八一年）などカント哲学に見られるそれと同様、万人に開かれたものであり、一部の盟友のみが与り得る密儀（Mysterien）の様な閉じられたものではない。このことは第一部の「聖夜」が誰にも光明を投げかけ、単に浪漫情緒の持主にのみ印象深い秘跡でなく、遁世ならぬ日常の現実に根付いている点に既に確かめられるし、また「聖夜」が「われらの人生には全く無関心で」（註(44)）いるのでなく、むしろ目

立たずそれとなく「隠れて働きかけている」（註(45)）と言える脈絡に見て取れる。

蓋し開かれたと言われる新たな契機は何気ないことのようであるけれども、実は『パンとぶどう酒』の有する大きな魅力となっている。なぜなら孤高の詩人とまで称されるヘルダーリンが、これ程までに心開くことは稀と思われるからである。例えば『ヒュペーリオン』第一巻（一七九七年）の母胎となる『ヒュペーリオンの青春時代』（一七九五年）では、明確にこう語られている。

君自身を大切に秘しておけ（Bawahre dich）、若き魂よ！　君はこの世に属していないのだ。この世界とあまり係わるな！(52)

通例ヘルダーリン像が遁世風浪漫情緒へと傾くのも、この様な詩人の姿勢に由来しており、実はこちらの方が看過され得ない素直な心根であり、むしろ『パンとぶどう酒』のように日常の現実が聖化されることの方が稀有な出来事なのである。

この点もし稀有な詩想が萌えなかったならば如何なる歌われ方が可能であったのか？　と問うならば、恐らく一つの解答がヘーゲルの詩歌『エレウシース、ヘルダーリンに』（一七九六年）に見い出されるであろう。当作品も『パンとぶどう酒』と同様に、「聖なる夜（heil'ge Nacht）」（第八〇句）を契機として歌われ、既出一七九四年ヘーゲル宛書簡の「合言葉――神の国」（註(12)）を踏まえて詩想展開する。但し「聖夜」は此所で一種の密儀風閉鎖空間へと変貌してゆく。

かくて密儀に聖化されし者が自らに禁ぜしことは、或る賢明なる掟が精神の貧困な者どもに禁ぜしこと。告げ知らせてはならぬと言うこと、

八〇　密儀の聖なる夜に見聞し感得したことを――(53)

（『エレウシース』第七八句―第八〇句）

此所では『ヒュペーリオン』第一巻と同様に、「霊感（Begeisterung）(54)」（註(6)参照）が主役をなし、これが夜のエレウシース祝祭に君臨する豊穣の女神デーメーテールの「啓示（Offenbahrungen）」への導き手となる。

ああ！　今や汝の至聖所の門が自ら突如開くならば、
おおデーメーテール、エレウシースの玉座に宮居す女神よ！

四五　霊感に陶然として、私は今や感ずるであろう、
汝の真近ゆえ戦慄を。
して汝の啓示を理解するであろう(55)。

（『エレウシース』第四三句―第四七句）

「霊感」による「啓示」への道は、就く密儀の聖なる「夜に輝く星辰（glänzendes Gestirn）」（第二七句）が鏤められた天空の「直観（Anschaun）」（第三〇句）に没入することにある。

わが眼指は高く、永遠なる天蓋を仰ぎ、
汝を見遣る、おお夜に輝く星辰よ！
…

三〇　心意は直観の中で没我へと至り、
わがものと呼びしもの消え去り、
私は不可測の彼方へと身を委ね、
この中に我在り、我は一切で正に万有なのだ。
再び我に帰ると疎遠で、

三五　わが思考は無限を前に恐怖を抱き、驚嘆して
この直観の深み（Anschauns Tiefe）を摑み得ず(56)。

（『エレウシース』第二六句―第三六句）

『ヒュペーリオン』第一巻なら、この「直観の深み」は、「最高善、…一切にして万有、…美、…新たな神の国（der neuen Gottheit neues Reich）…おおディオティーマ、ディオティーマ、天上の本質よ！(57)」（第一四書簡）と、甘美で純粋な恋の燃焼へと展開することにな

る。

その所謂ディオティーマ体験への道程において「直観」に基ずく「霊感」を、ヘルダーリンは「全能」と高唱している。

渾然一体とした霊感の全能（die Allmacht der ungetheilten Begeisterung）に比べれば、如何なる熱意ある人の勤勉も実際何と無力なことか(58)。

（『ヒュペーリオン』第一巻、書簡四）

同様にヘーゲルも『エレウシース』において、「筆舌尽くし難い感情の深み（des unaussprechlichen Gefühls Tiefe）(59)」（第六八句）を優先させ、「無駄にも探求する（vergebens sucht）、研究者の好奇心は（des Forschers Neugier）――愛知哲学以上を（mehr, als Liede zur Weisheit）(60)」（第五七句―第五九句）と述べ、「探求」の意味を低次に置いている。此所から讃歌は誕生するけれども、恐らく思想詩の可能性は開かれないであろう。

本来は「知恵の探求（Liebe zur Weisheit）」（註(60)）こそヘーゲルやヘルダーリンの関心事である。けだし『エレウシース』や『ヒュペーリオン』第一巻をめぐる「神の国」への扉は「探求」より、むしろ「直観の深み」（註(56)）や「感情の深み」（註(59)）に開かれている。なぜなら『エレウシース』第六〇句が語るように、「知恵を物にするために、探求者（Sucher）が言葉を穿鑿する(61)」ことが危惧されるからである。

あたかも大神ゼウスの頭から処女神アテーネーが誕生したように、知恵を探求する哲学は、無限にして神々しい存在の詩作（Dichtung）から沸き出る。…　霊感の時にのみ万有が最も親密に協和する事実を経験しない人は、懐疑する哲人にさえならないだろう(62)。…　分別知（Verstand）は精神美（Geistesschönheit）を欠けば、如才ない徒弟の如く、親方の至上命令に盲目に従い、粗材から垣を組み、組み立てた柵を釘で止め、親方が手懸ける庭園の枠を囲うだけなのだ。…　単なる分別知からは、いかなる哲学も誕生しない。なぜならば知恵を探求する哲学は、既存の事柄に限られた目先の認識を越えているからである(63)。

（『ヒュペーリオン』第一巻、書簡三〇）

ヘーゲルは『エレウシース』第五九句で、「探求者が知恵を（既存のものとして）所有している（sie besizen die Sucher）(64)」と述べている。これは明らかに、「分別知」（註(63)）の段階での問題に過ぎず、この「分別知」の「探求者」はせいぜい「既存の事柄に限られた目先の認識（die beschränkte Erkenntniß des Vorhandenen）」に関与するに過ぎないから、女神デーメーテールのエレウシースの密儀における「霊感」と「啓示」（註(55)）には無縁の衆生とならざるを得ないと言うことである。

他方「直観の深み」（註(56)）は専ら「密儀にて聖化され（der geweihte）」（註(53)）に可能とされる。そして「分別知」から解放された「空想（Phantasie）」（第三七句）が、想像力の浪漫風な高翔に拍車をかけることになる。

心意に空想は、永遠（das Ewige）を近付け、
それを形象と結婚せしめる。よくぞ汝ら
崇高な神霊たち、気高き幽魂たちよ、
四〇　汝らの額からは完全性が輝き出るのだ！(65)

（『エレウシース』第三七句―第四〇句）

基本構図は既に触れたシラーの詩歌『幽魂の国』（一七九五年）を想わしめる。つまり天界は星辰の夜空に似て「永遠に清澄にして明鏡の如く」（註(40)）と言える「完全性（Vollendung）」（第四〇句）を宿し、俗界の現実に対しては超然としている。

他方『パンとぶどう酒』第一節の「聖夜」が、日常の市民生活に開かれていることは前述の通りで、此所では「霊感の全能」（註(58)）が「分別知」を見下して、「高邁」（註(23)）な「高みへと落ち込む」（註(11)）ことのないように慎しみ深い地道な詩想展開が繰り広げられている。即ち「聖夜」はキリスト像に似て目立たず「隠れて働きかけている」（註(45)）

と言え、『パンとぶどう酒』の主要な契機たる精神のへりくだり(Humilitas)をそれとなく物語っている。もはや『エレウシース』の「密儀にて聖化されし者」(註(53))は、修道院や教会の内陣の如き密室に閉じこもることなく、敢て「乏しき時代の詩人(Dichter in dürftiger Zeit)(66)」として素面の現実へと投げ出される。だが孤高の詩人が心開く契機は、『パンとぶどう酒』冒頭の都市像に兆しており、此所では市民の生活空間が聖化されているのである。

〔i〕「浪漫化」

もしエレウシースの密儀のように何もかも秘蔵の荘厳に隠れてしまえば、恐らく詩歌の道は「叡知直観」にのみ頼る審美観へと至るであろう。そして恐らく浪漫美学は、この筋の成果をシェリングの『芸術哲学(Philosophie der Kunst)』(一八〇二年)に見い出すことができると思われる。

この遍く認められ如何なる仕方においても否定し去り難いこの叡知直観(intellektuelle Anschauug)の客観化が芸術そのものなのである。なぜなら美の直観が正に客観化された叡知直観なのであるから。… かくなる直観が全哲学知の機関である。だがこの直観は感覚ではなく叡知に属し、客観をも主観をも対象とせず、それ自身は主観とも客観ともならない絶対的同一(das absolut Identische)を対象とし、この純粋なる内観そのものは、自己反省して自らを対象化することもできないのである(67)。

(『先験的観念論体系』一八〇〇年、第六部「哲学の普遍機関の演繹、或いは先験的観念論の根本命題による芸術哲学の基本命題」第三章「全哲学体系への芸術の関係」)

密儀の聖夜に兆す「霊感」や「啓示」(註(55))より伸びる思索の道の一つは此所に帰着する。そしてこれをノヴァーリスの断章(一七九八年)の言葉で換言すれば、「詩歌は真正にして絶対なる現実(das echt absolut Reelle)であり、これがわが哲学の核心である(68)」と表現されることになる。

全ては「絶対なる現実」の根源から照らし出され、万象は聖化される。このことをノヴァーリスは「浪漫化(Romantisieren)」と呼ぶ。

世界は浪漫化される必然にある。かくして根源の意味が再び見い出される。浪漫化とは質的累乗で高めることに他ならない。… 私が俗なものに崇高な意味を、日常に対し神秘にみちた外観を、既知のものに未知の尊厳を、有限なものに無限の陰影(Schein)を与えるなら、こうして私は浪漫化しているのである(68)。

(ノヴァーリス『断章』一七九八年)

翻って考えてみるに、既に本論で言及した『パンとぶどう酒』第一節の聖化の意味が、此所に「浪漫化」という用語の下に見事説明されていると思われる。

ならば「浪漫化」の一語でヘルダーリンの「聖夜」が蔽えるか? と言えば、必ずしもそうとは言えないのではなかろうか。ひとつこの脈絡をこれから考えてみることにしよう。まず「浪漫化」を提唱するノヴァーリス自身において、これが如何なる過程を示し、どのような詩歌象徴を織り成したのであろうか? と問うならば、まずその具体例として思い浮かぶのが、何より『夜の讃歌』である。しかも本論との係わりで当讃歌を取り上げるのは実に要を得ている。なぜなら「聖なる夜」という主題の共通性のみならず、文学史上の出来事として、『パンとぶどう酒』が一八〇〇年秋より歌い出されるに先立ち、既にその直前一八〇〇年夏八月に『夜の讃歌』が公刊されており、恐らくヘルダーリンもこれによりノヴァーリスの詩歌象徴に通じていたと考えられるからである(69)。

「浪漫化」の眼目は『夜の讃歌』の場合、「夜の太陽(Sonne der Nacht)」と呼ばれる夭折した「恋人(Geliebte)(70)」、つまり詩人の魂に宿る無垢な処女への追憶に懸かっており、この死と再生が神人キリストの死と復

活に重ねあわされる。現存は全てこの「絶対なる現実」（註(68)）の根源より照らし出されることになり、これこそ讃歌の精華に他ならない。「かくして根源の意味が再び見い出される」（註(68)）と『断章』でノヴァーリスが述べていることは此所で、魂の深淵に宿る「夜の太陽」を導きの糸として、死せる現実に誕生する「再生の理念(71)」を追求することとなる。

「夜の太陽」は言わば「至福なるギリシア」のように詩魂に輝き、竟にはこの光明の下にキリスト像も問われるのであるけれども、目下それに先立つノヴァーリスの「夜」は、「神聖にして筆舌尽くし難い神秘な夜(die heilige, unaussprechliche, geheimnisvolle Nacht)(72)」として秘蔵の荘厳に住まう。従ってこう歌われる。

Himmlischer, als jene blitzenden Sterne, dünken uns die unendlichen Augen, die die Nacht in uns geöffnet.

かの輝く星辰よりも神々しく私達に思われるのは、夜が私達の心に開いた無限の眼なのだ(73)。

明らかに「内観（eine innere Anschauung）」（註(67)）に宿る「無限の眼」はそれ自体で十分に空無へと開かれ、敢て『パンとぶどう酒』第十六句でのように「星辰」の天空が「憂慮」（註(36)）をもたらす必要もないが如くである。

他方『パンとぶどう酒』の「聖なる夜」は前述の通り、確かに問題意識が人間の「内観」の側に高い比重を占めてはいるものの、カントの言う「わが頭上に輝く星辰の天界と、わが内なる道徳律」（註(35)）に近い内外の相互補完性を留めている。故に外からの「配慮（Bekümmern）」も問われる。

一五　…　…　die Schwärmerische, die Nacht kommt,
Voll mit Sternen und wohl wenig bekümmert um uns,

一五　…　…　霊気溢れる夜が到来する。
星辰に輝きみち（清澄な）夜は、恐らく私達などまず配慮もせず、
（『パンとぶどう酒』第一五句―第一六句、註(22)）

「無限の眼」は此所で無数の「星辰」と、「配慮」を契機として照応し合い、然り気なく「分別知」（註(63)）にも無量無辺の神秘が語りかける。この時空を象徴しているのが、正に「隠れて働きかけている」（註(45)）と言える「月影」に他ならない点は既に述べたことである。

「隠れて働きかけている」とは、「筆舌尽くし難い神秘な聖夜」（註(72)）が一面ではあくまで「隠れて」いることを意味しており、この面では『パンとぶどう酒』の「聖夜」が『夜の讃歌』で深い奥行きを賦与されて歌い上げられた夜に繋がることになる。つまり根源の神性には何処か「分別知」の踏みこめない幽かで玄い霊妙さが宿る点は『パンとぶどう酒』でも顧慮されており、それ故に「月影」も基本的には「隠れて」いる。但し正に「隠れて」いるからこそ「浪漫化」でき得ると言え、この点では『夜の讃歌』の場合も同様に「隠れ」た「絶対なる現実」の根源より、究極には全てが聖化されることになる。共にこれが「詩歌（Die Poesie）」（註(68)）の働きであることは言うまでもない。

他方ヘーゲルの『エレウシース』に関して「浪漫化」を話題にすることは困難である。なぜなら「無限の眼」と言えるような空無が詩想に孕まれず、むしろ「筆舌尽くし難い感情の深み」（註(59)）や「直観の深み」（註(56)）は「隠れ」ることなく露呈している。つまり口先で神秘は説かれているものの、詰まるところ「心意は直観の中で没我へと至り」（註(56)）ゆく筋へと解消され、元来歌わんとしたエレウシースの密儀に相応わしい荘重な祝祭空間が開かれず、詩想展開が終結に達しても依然として、「既知のものに未知の尊厳を、有限なものに無限の陰影を与える」（註(68)）ことに聊も成功していないのである。

『夜の讃歌』と『パンとぶどう酒』を結ぶ純粋な詩魂の絆は、この様に

『エレウシース』との対比の下に浮き彫りにされる。果してヘーゲルの歌わんとした密儀の夜の秘蔵の荘厳は、むしろ後に新たな解釈の下に歌い出されたと言える。即ちノヴァーリス同様ヘルダーリンも、「隠れ」た聖夜の根源から「浪漫化」を目指し、エレウシース密儀の「聖なる夜」にも紛う祝祭空間を抒情の調べに乗せる。但し共に各々の史観に適う時空にそれを繰り広げてゆく。

燈火が明るく燃え、
処女らは集い、
燈油に事欠かぬ。
はや遙か彼方が
汝の祭列で響動めき、
星辰が人語と声で
われらを呼ばんことを。

汝を求め、聖母マリアよ、　…(74)

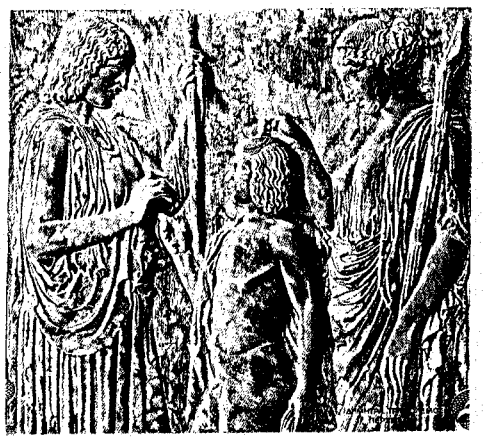
（『夜の讃歌』第五歌）

「汝」とはもはやエレウシースの女神デーメーテールではなく、西欧の夜に君臨する神や聖母となる。古代の祝祭は西欧キリスト者の秘跡へと「質的累乗で高め」られ、「既知のものに未知の尊厳を与える」「浪漫化」（註(68)）が此所で見事に達成されているのである。

〔j〕「人倫」

ノヴァーリスの『夜の讃歌』に見られる「浪漫化」は、『パンとぶどう酒』において「至福なるギリシア」が光明の淵源として「西欧の夜」に立ち開かることにより、更に一段と「質的累乗で高め」られ「既知のものに未知の尊厳を与える」（註(68)）ことになる。すなわち浪漫派の詩歌が結局は西欧キリスト者の魂の古里を、「かの浪漫風の遙か彼方（die romantische Ferne）(75)」、「深遠で浪漫風な時代（eine tiefsinnige und romantische Zeit）(76)」、つまり中世に見い出したのに対し、ヘルダーリンは既成の「キリスト教世界（Die Christenheit）あるいは西欧（Europa）(77)」を死圏ギリシアへと突き抜ける。なぜなら「至福なるギリシア」とは、一度キリスト教西欧で死して廃墟となりて後に、新たに復活が希求されるからこそ「至福」なのであり、かく取り返しの効かない死圏ギリシアとは異なり、なお中世は幾何とも近世キリスト教西欧に残存しているのである。

再び「聖なる夜」は、キリスト教西欧のみならず古典ギリシアの光の下にも見直され、根源の神性は一重に秘蔵の荘厳に「隠れ」て「浪漫化」するのみならず、有無の両義性を孕む濃淡細やかな明暗の下で「隠れて働きかけている」（註(45)）と言える幽玄霊妙な趣を湛える。この様はあたかも考古学の発掘成果が切り開いた芸術の古里ギリシアの廃墟美に似た観を呈している。そこで廃墟美の光の下に話題の密儀の「聖なる夜」（註(53)）を再考してみると、この関連では見事な古典芸術作品『エレウシースの浮彫(78)』（一八五九年発見）に刻まれた秘められざる女神像が注目されることになる。



この浮彫は大きなもので、今日アテーナイの国立考古学博物館の第十五室に、アルテミシオンのポセイドーン像

（一九二八年発見）と双璧なして安置されており紀元前五世紀ギリシア古典芸術を代表している。浮彫の左側に威厳ある女神デーメーテールが立ち、左手に笏杖を右手に麦穂をもち、黄金の穂を中央に立つ少年トリプトレモスに手渡そうとしている。少年の後方つまり浮彫の右側には女神の娘ペルセポネーが優しく右手でトリプトレモスの頭を撫でて祝福し、左手には大きな松明を抱えている。この浮彫は豊穣の女神が人類に初めて穀物の栽培を伝えた場面と考えられる。これを鑑賞するにつけ興味深く思われることは、ふつう密儀の真理の「隠れ」た聖域とされるエレウシースが、此所では秘蔵の荘厳から解き放たれ「分別知」（註(63)）にも然り気なく「働きかけている」ことである。

後にヘーゲルは『美学講義』（一八二三年／二六年）で、この脈絡を逆手に取る。

だが、全般的に見て、密儀の中には偉大な知恵または深い認識が隠されているとは思われない。むしろ密儀は単に古い、いろいろの伝承、後に真正の芸術（die echte Kunst）によって改造されるものの基礎を保存しているにすぎず、　…(79)

同旨をヘーゲルは『歴史哲学講義』（一八三七年）で更に敷衍してこう述べる。

密儀はただこのように始源が古いだけであって、それがギリシア人の意識の中にすでに含まれていたものよりも以上の知恵を含んでいなかったことは、たしかである。ところがアテナイ人はみなこの密儀に入ったが、ソクラテスだけは入らなかった。なぜかといえば、学問や芸術は密儀から生まれるものではなく、知識は決して秘儀の中にあるものではないということを彼はハッキリ知っていたからである。実際、真の学問（die wahre Wissenschaft）というものは、むしろ意識の公道（das offene Feld des Bewußtseins）の上にあるものなのである(80)。

ヘーゲルの所論が浪漫美学（註(67)）と真正面から対立していることは明らかで、就く魂と美の古里ギリシアに関し「密儀」ではなく「芸術」や「学問」こそが、古典文化の精華に他ならぬ旨が力説されている。

恐らく秘蔵の荘厳を宿す「密儀」の如く根源より照らし出されることも、また同時に「芸術」や「学問」にて「意識の公道」の上に表現することも共に重要であり、ニーチェの『悲劇の誕生』（一八七二年）第四章の言葉を援用すれば、この両者つまり「ディオニューソス的なものとアポローン的なものとが、常に止むことなき新たな誕生を繰り返し、相互に高め合いながら古典ギリシアの本質に君臨してきた(81)」と述べることができよう。即ち『歴史哲学』でのように、ソークラテース以降の「学問」に余りにも比重を置き、「自意識という内なる太陽（die innere Sonne des Selbstbewußtseins）(82)」を力説し過ぎるとなると、この「自意識」の裏で密かに輝き、「浪漫化」する「夜の太陽（Sonne der Nacht）」（註(70)）に盲目となる危険を孕んでおり、西欧キリスト者の自我意識は倦むことなき帝国拡張の波に呑みこまれざるを得なくなるであろう。故に「かの浪漫風の遙か彼方」（註(75)）も、「至福なるギリシア」と同様に、この腫瘍を鎮静させる祈り（Religio）の力を牽きつけるのである。

但し「密儀」の真理を顕在化させんとするヘーゲルにも一理あり、実は『パンとぶどう酒』が「浪漫詩文の傍系（ein Seitentrieb der romantischen Poesie）(83)」へと組み込まれ得ない根拠もここに存すると思われる。つまりノヴァーリスの言う「浪漫化」（註(68)）では、ヘルダーリンの「聖なる夜」は蔽い切れないと言える。今後はこの問題に的を絞って論述を進めることにしたい。まず問題の基本点を明確にしておこう。既に廃墟美の中から『エレウシースの浮彫』（註(78)）を取り出し秘められざる女神像に触れた折に、聖域エレウシースの秘蔵の荘厳が解き放たれ「分別知」にも然り気なく「働きかけている」のを確かめた。そして実は『パンとぶどう酒』第一節で正に「隠れて働きかけている（verborgenwirkend）」（註(45)）と言える「月影」の「聖夜」にも、この側面が読み取

れる。従ってその第十四節以下（註(22)）でこう歌われ得たのである。

見よ！　して我らの大地の影像たる月も
一五　また秘蔵の荘厳より解き放たれ、霊気溢れる夜が到来する。

此所では『夜の讃歌』冒頭でのように、わざわざ「（昼から）転じて意識下の筆舌尽くし難い神秘な聖域へ(84)」と赴く必要はない。なぜなら何時とはなしに昼を内包しながら、月夜が「隠れて働きかけている」からである。

例えば『パンとぶどう酒』の第一句は、一見したところ「燈火」のみが目に留まる。

…　still wird die erleuchtete Gasse,
…　密やかに街路には燈火がともり、

ところが此所では同時に然り気なく「月影」が「隠れて働きかけている」と考えられ、実際上原典は「密やかに街路には（燈火と月影の）光明(Erleuchtung)が満ち」（註(18)）と読解される。従って形容詞「光が満ち(erleuchtet)」を、英訳のように「淡い油燈が点り(in pale lamplight)(85)」（ハンバーガー訳）と解するならば、現実の半面に過ぎなくなることになる。そしてこの「月影」の下に照らし出される都市像に、昼と夜との断絶は見られない。

満ち足りて家路へと、昼間の歓びに別かれを告げ、安らぎを求め歩み
ゆく人々
して収支得失を慮る思慮深い家長は
五　悠然と和やかにわが家にくつろぐ。　…
して手仕事の品々もなく安らう、（昼間は）忙しき広場の市場。

「昼間の歓び(Freuden des Tags)」（第三句）や日昼の「収支得失(Gewinn und Verlust)」（第四句）が、「（昼間は）忙しき広場の市場(der geschäftige Markt)」（第六句）と同様に、月夜に内包され「安らう」と言える。

この様に『パンとぶどう酒』の「聖なる夜」は、一重に秘蔵の荘厳の根源から「隠れ」て「浪漫化」するのみならず、同時に顕在化して直接市民生活の日常に「働きかけている」のである。

「神秘な聖夜」（註(84)）はもはや「叡知直観」（註(67)）の専有ではなく、この「精神美」が『パンとぶどう酒』では「分別知」（註(63)）へと「隠れて働きかけている」のであるが、しかし此所で「詩歌作品中の目に見える素材」つまり都市像が、「詩人の心情や世界」と矛盾なく折り合っているわけではない。

疎遠な形式は疎遠であればある程、より生き生きと働きかけるに違いない。すなわち詩歌作品中の目に見える素材が、その基底にある素材たる詩人の心情や世界に対して似ても似つかぬものであればある程、精神、すなわち詩人が自らの世界で感得した神性が、詩歌作品にあらわれる疎遠な素材の中において、より明確に表出され得るのである(86)。

ヘルダーリン自身が美学芸術論文『エムペドクレースの基底』（一七九九年）で、こう述べているのが意味深長である。即ち「詩人が自らの世界で感得した神性」、例えば「聖なる夜」はノヴァーリスにおいてと同様、本質から見ると『パンとぶどう酒』の場合も市民生活の日常とかけ離れている。だが正に此所に西欧キリスト者特有の逆説が働き、遠く相互に隔った両極が微妙な明暗を織り成し稀有な詩魂が現実に開かれることになる。

哲学史上この逆説の妙を理論づけると思われるのが、ヘーゲルの『精神現象学』（一八〇七年）と思われる。すなわち此所では「叡知直観」（註(67)）に専有の「力無き美が分別知を憎む(Die kraftlose Schönheit haßt den Verstand)(87)」と批判され、「分別知」は再びシラーの『ギリシアの神々』初稿（一七八八年）でのように「知性(Verstand)(88)」へと深化され、厳然と「美」と対峙し合うことになる。

だが死を厭い、荒廃からきれいさっぱりと回避する生ではなく、むしろこの死を耐え、この死の只中において自立する生が、精神の生（das Leben des Geistes）なのであり、絶対的分裂（die absolute Zerrissenheit）の只中においてこそ、精神は真理を獲得するのである。精神がこのような力量であるのは、否定的なものから目を逸らし、これは何でもないとか偽りであるとか言って片をつけ、別事に移ってゆくような実定的なもの（das Positive）であるからではなくて、精神が否定的なもの（das Negative）を見据え、この否定的なものに留まるからこそそうなのである(89)。

（『精神現象学』序論、一八〇七年）

『パンとぶどう酒』において、この「否定的なもの」は現実の「乏しき時代」（註(66)）として詩魂に迫り、「至福なるギリシア」から見た「この死の只中において、精神の生が自立する」のである。

話題の『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」も同様に、単なる「叡知直観の客観化」（註(67)）ではなく、言わばシラー風の「理想と人生」の相互対話を基調としている。但しシラーなら「この恐怖の深淵を越え（Ueber diesen grauenvollen Schlund）／いかなる小舟も、いかなる橋の弧も繋がず（Trägt kein Nachen, keiner Brücke Bogen）(90)」と歌い、彼岸と此岸との間に横たわる「絶対的分裂」の潭を際立たせるのみであるが、他方ヘルダーリンの場合は前述の如く、詩想の核心キリスト像に似て「聖夜」の「月影」も幽かに玄く「隠れて働きかけている」（註(45)）のであるから、正に日常と詩魂との「絶対的分裂の只中においてこそ、精神は真理を獲得する」（註(89)）と言える。

既に折に触れ述べたように、詩人の瞑想にとり眼前の都市像は、始めから親密なものではない、それは丁度キリスト教西欧と古典ギリシアの相克が言わば水と油の如く容易に融解し得ないのに似ている。つまり西欧キリスト者には古典ギリシア造形が、瞑想に沈む詩魂には日常市民生活の都市像が、「疎遠であればある程、より生き生きと働きかける」（註(86)）ような現実を、詩歌象徴の織り成す時空に繰り広げた成果が『パンとぶどう酒』と解されるのである。

かく史実へと開かれた『パンとぶどう酒』の「聖なる夜」は、ヘーゲルの『エレウシース』に見られる閉じた密儀の聖域を人間へと解き放ち、後年ヘーゲルが説く「真正の芸術」（註(79)）と「真の学問」の下に走る「意識の公道」（註(80)）を重んじる。この「芸術」と「学問」の両者は『パンとぶどう酒』の場合、悲劇の誕生とソークラテースの死の意味を問う形で話題となり、やがては双方が神の死を物語る神人キリストの受肉と受難へと繋がる。そこへと至る道程において第二節の終結部では、「聖夜」と共に覚醒の哲人ソークラテースの姿が想起される。

だが聖夜は遅疑逡巡の折に
　暗闇に住まう私達に何か拠り所を在らしめんと
　瑣事忘却と聖なる酔いを恵み、
　滔々たる言葉を、崇高なるダイモーン神エロースの徒の如く
　微睡なき言葉を恵み、満満と溢れる杯を、果敢なる生を、
　神聖なる想起をも恵むのだ、夜に目覚めて踏み留まるように(91)。

（『パンとぶどう酒』第三一句以下）

三五

「神聖なる想起（Heilig Gedächtniß）」などを基軸とする魂の不滅への問いは第二節（第一九句―第三六句）以下の考察へと譲ることになるが、少くとも此所では「夜に目覚めて踏み留まる」「エロースの徒」ソークラテースを留意することにより、もはや「エレウシース」が「密儀」の神秘に閉じることなく、むしろ「真の学問」や「真正の芸術」たる哲学や悲劇に開かれた形で問われることを確認しておきたい。なぜなら「かの偉大なる神秘は、解明されねばならぬ」（註(49)）からである。

「すべての歓びは、永遠を欲する――、――深い深い永遠を！」（註(1)）「神の国が来る。僕らは無為に手を拱いていてはいけない！」（註(14)）等々を導きの糸として、本論が扱う『パンとぶどう酒』第一節「聖

なる夜」は、秘教の帳に被われたり遁世の彼方へ無限の憧憬をはせる闇ではない。むしろそれは魂の古里ギリシアの碧空と響き合う清澄な月夜であり、久遠の彼方までもが、「隠れて働きかけている」（註(45)）と言える現実である。この現実の下において稀有な内外の邂逅が見られ、孤高の詩魂も心開き、都市生活の日常が聖化され、正に此所が祝祭への門となる。

やがては古典ギリシア悲劇祝祭の時空へと歴史軸を遡求する地盤が此所にあり、この点において『パンとぶどう酒』第一節は、ヘーゲルの『エレウシース』に見られない現実への広がりを獲得している。成程一見した所、相互に詩想は類似している。

わが周囲に、わが内に、安らぎ（Ruhe）が住まう。――　…(92)
（『エレウシース』第一句）

だがヘーゲルの場合、市民生活の日常は否定されるのみである。

…――　忙しき人間たちの
倦むことなき憂慮（Sorge）は眠り、　…(92)
（『エレウシース』第一句―第二句）

正反対に「憂慮」とか「配慮（Bekümmern）」（註(36)）こそ、『パンとぶどう酒』冒頭の都市像に兆す新たな契機である。

して収支得失を慮る思慮深い家長は
五　悠然と和やかにわが家にくつろぐ。　…
（『パンとぶどう酒』第四句以下、註(18)）

目先の「倦むことなき憂慮」が詩歌象徴の格調高い波に揺られ、何時とはなしに内省する魂の歌声となり、市民生活の日常が正に芸術の力により霊妙に形造られ、竟には「霊気溢れる夜」が歌い出される。

一〇　滔々と湧き、　…　…　して噴水が
ひそやかに黄昏の夜気に響き渡たる晩鐘の音。
して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばわる。
今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を（天上へと）揺り動かす。
見よ！　して我らの大地の影像たる月も
一五　また秘蔵の荘厳より解き放たれ、霊気溢れる夜が到来する。
（『パンとぶどう酒』第九句―第一五句、註(18)／註(22)）

此所で密儀の「叡知直観」に拠る「美」（註(67)）に代わるものが表出されていると考えられるが、果してそれは何であろうか？

前述の古典芸術『エレウシースの浮彫』（註(78)）を念頭に置きながら『パンとぶどう酒』第一節を考え併せる時、両作品に共在する本質を言い中てるに恐らく、「人倫の偉容（eine sittliche Größe）(93)」というシラーの言葉よりも適切な表現は見い出し難いであろう。そしてこう考えるなら同時に、後に『エレウシースの祝祭』（一八〇〇年）と改題されたシラーの詩歌『市民の歌（Bürgerlied）』（一七九九年）の最高潮が必ずや想い併されるに違いない。

二〇五　だが人間は、（獣と神との）両者の中間にありて、
相互に睦み合うべきであり、
して遍に人倫（seine Sitte）によりて
人間は自由で威力ある存在となり得る(94)。

「エレウシース祝祭」の夜の面を「浪漫化」（註(68)）が開示する一方、他方シラーの解釈によりそれは昼の面から「市民の歌」として摑まれる。そして『パンとぶどう酒』第一節はこの両面を表裏一体として有する詩歌象徴と看做され得よう。

ノヴァーリスの「神秘な聖夜」（註(84)）では蔽い切れない面が、この様にシラーの筋を考え併せることにより明らかとなり、『パンとぶどう酒』はもはや「浪漫詩文の傍系」（註(83)）へと解消されず、むしろ堅実な十八世紀詩歌の継承としても見直される。かくして密儀の聖域エレウ

シースは秘蔵の荘厳から解き放たれるわけであるが、この方向への萌芽は既にシラーの論文『モーセの使命』（一七九〇年）に明確に表明されている。

実のところ或る意味において反駁の余地なき真実は、私達の今日享受している啓蒙（Aufklärung）が、大部分モーセの宗教（die Mosaische Religion）のお蔭だということである。…(95)　…　エジプトの密儀はその座をイシスとセラピスの神殿に有し、これを範として後にエレウシースやサモトラケーの密儀が、近年には自由石工結社が出来上った。…(96)　…　モーセが第一人者であるのは、密儀の秘せられたこの成果を単に公言するのみならず、これを国家の基礎（Grundlage eines Staats）と成すことさえ敢行する点である　…(97)

シラーは更に「モーセの使命」を「エレウシース祝祭」にも見い出し、これを「市民の歌」として歌い上げてゆくことになるが、これに先立ち「人倫（エートス）の太陽の軌道（die Sonnenbahn der Sittlichkeit）」が、シラーの長詩『芸術家』（一七八九年）第八五句で高唱されている点も見逃せない。

美の光の道は、一層と麗しく絡み合い、深沈してゆく
八五　人倫の太陽の軌道の中へと(98)。

「美の直観」つまり「叡知直観の客観化」（註(67)）が此所では、「浪漫（ロマン）化」する根源より照らされると言うよりは、むしろ「人倫の太陽の軌道の中へと深沈してゆく」ことになる。そしてこの「意識の公道」（註(80)）にシラーが「啓蒙」（註(95)）の成果を見ていることは間違いなかろう。後にヘーゲルが古代ギリシアを美の国よりはむしろ「人倫（エートス）の国（das Reich der Sittlichkeit）(99)」と摑む源も此所にあり、また『パンとぶどう酒』第一節の基本性格を考える上でもこの「啓蒙」の筋を見過すわけにはゆかないのである。

一　静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火（ともしび）がともり、
二　して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。
三　満ち足りて家路へと、昼間の歓びに別れを告げ、安らぎを求め歩みゆく
　　人々。
四　して収支得失を慮（おもんぱか）る思慮深い家長は
五　悠然と和やかにわが家にくつろぐ。（黄昏の今は）葡萄も花束もなく、
六　して手仕事の品々もなく安らう、（昼間は）忙しき広場の市場。
七　だが他方、竪琴の音（ね）が彼方の庭園から響いて来る。恐らくは
八　そこで恋人が奏で、或いは孤独な者が
九　彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が
一〇　滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ迸り、芳香に匂う花壇を霑（うるお）している。
十一　ひそやかに黄昏（たそがれ）の夜気に響き渡る晩鐘の音（おと）
十二　して時刻（とき）を想い、その数を夜警は声高（こえだか）に呼ばわる。
十三　今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を（天上へと）揺り動かす。
十四　見よ！　して我らの大地の影像たる月も
十五　また秘蔵の荘厳より解き放たれ、霊気溢れる夜が到来する。
十六　星辰に輝きみち（清澄な）夜は、恐らく私達などまず配慮もせず。
十七　彼方で光明を放ち、驚嘆させ、人間（じんかん）では異邦の者として
十八　山頂の上高く、悲愴かつ壮麗に立ち現われる。
（『パンとぶどう酒』一八〇〇年―〇一年、第一節、第一句―第十八句）

註解

(5)エレウシース

(a)「悲愴かつ壮麗」

(1) 批判版ニーチェ全集、第六部、第一巻、一九六八年、四〇〇頁。和訳ニーチェ全集、白水社、第二期、第一巻、薗田宗人訳『ツァラトゥストラはこう語った』一九八二年、第四部の一九「夜にさすらう者の歌」四八二頁―四八三頁。

(2) シュトゥットガルト版ヘルダーリン全集、一九四六年―七七年（索引一九八五年）、第二巻、九〇頁。

(3) アンガー『ヘルダーリンの主要な詩歌』一九七五年、七〇頁。『パンとぶどう酒』第十一句から第十二句を念頭に置きこうある。

晩鐘や夜警の叫び声が強く主張する点は、時の分断性や無常性を知っていることであり、これらの音響は故に、真正な時間（諸行無常）意識を誘う。

(4) シュミット『ヘルダーリンのエレギー『パンとぶどう酒』』一九六八年、三五頁には、第六句までが「忙しい生活の価値領域」とされ、第七句以下の「崇高な精神的瞑想の生活の価値領域」と区別され、「引き続く詩行では、もはや昼の喜びについては語られず、それとは全く別種である、夜の時代におけるディオニューソス的歓びについて語られる」と評され、「噴泉」（第九句）と「晩鐘」（第十一句）が「浪漫詩歌の二大主題、彼方と逝く時の流れ」に関連づけられている。

(5) ブレンターノ『日記書簡』（一八一六年十二月）。註(2)ヘルダーリン全集、第七巻（資料篇）第二分冊、四三四頁。

冒頭六句は、現実へ向けての世の営みが疲労へと至るものではないでしょうか。引き続く六句（第七句―第十二句）は、（失なわれた）時への憧れであり、喪失の感情ではないでしょうか。第七句に登場するのは、失なわれた無垢への回顧であり、（第九句から第一〇句にかけて）滔々と湧く噴泉は、正しき義人たちが飲んで元気となる約束の永遠の泉について語っていないでしょうか？　この義人たちを（第十一句の）晩鐘は、響き渡たる音を蔵する世界により、待ち望みそして祈るよう警告し、（第十二句の）夜警は時が満ちたのを声高に告げ知らせているのではないでしょうか？

(6) シュミット前掲書（註(4)）五三頁。註(54)参照。

詩人は追憶の力により、神々しく充実した過去の時代の現存を眼前に思い浮かべ、古代の英雄や半神や詩人たちの崇高なる形姿に霊感を感じて取り囲まれつつ、現今の（乏しき）時代における破壊的な威力から自らを救うのである。

(7) 「空無を孕む内面の飛翔」で『パンとぶどう酒』の詩想を「至福なるギリシア」（註(10)）へと突き抜け、竟にはヘルダーリンのキリスト像を理念追求する筋は、筆者の別論『ヘルダーリンの西欧ギリシア論』（一九八四年度／一九八五年度／一九八六年度・高知大学学術研究報告、第三三巻／第三四巻／第三五巻、人文科学篇、一三頁―七二頁／一頁～七二頁／一頁―六六頁）を参照されたい。

(8) 筆者の別論、『パンとぶどう酒』冒頭の都市像（一九八三年度・高知大学学術研究報告、第三二巻、人文科学篇、二一頁―七〇頁）を始めとして、『パンとぶどう酒』第一句より第十三句に至るまでの筆者の左記論文を参照。

内省と光明――『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その一（一九八五年度・高知大学学術研究報告、第三四巻、人文科学篇、一五五頁―二〇一頁所収）。

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その二――（四）思慮深い家長（一九八六年度・高知大学学術研究報告、第三五巻、人文科学篇、六七頁―一〇二頁所収）。

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その三――「離在」と「噴泉」（一九八七年度・高知大学学術研究報告、第三六巻、人文科学篇、一五頁―四二頁所収）。

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その四――晩鐘と時禱（一九八八年度・高知大学学術研究報告、第三七巻、人文科学篇、一頁―九〇頁

所収）。

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その五――林苑と盟約（一九八九年度・高知大学学術研究報告、第三八巻、人文科学篇、その二、一頁―二一四頁所収）。

(9)　全集（註(2)）第二巻、九四頁。註(66)参照。

(10)　全集（註(2)）第二巻、九一頁。

(11)　全集（註(2)）第四巻、二三三頁。

深沈する覚醒が君を去るところが、君の霊感の高揚の限界なのだ。
…　深みへと落ち込むと同様に、高みへと落ち込むことも有り得る。
深みへと落ち込まぬように柔軟性ある精神が、高みへと落ち込まぬように覚醒し深沈する思念に宿る重力が妨げる。

〔b〕「神の国」

(12)　全集（註(2)）第六巻、一二六頁。一七九四年七月一〇日ヘーゲル宛書簡八四。「神の国」は『マタイ福音書』第一二章、第二八節などに見られる表現である。註(16)参照。

(13)　全集（註(2)）第六巻、一二六頁―一二七頁。

(14)　全集（註(2)）第七巻（資料篇）第二分冊、一九頁。

(15)　全集（註(2)）第六巻、一二八頁。

(16)　希羅対訳『新約聖書』一九三〇年、八五頁。

(17)　例えばベックマン著『諸形式の言葉（Formensprache）』（一九六六年）三三〇頁―三四四頁所収『ヘルダーリンの『パンとぶどう酒』における夜の形姿（Bild）』（ヴィーゼ編『ドイツ抒情詩、形式と歴史』一九五六年、三九八頁―四一三頁所収）参照。

(18)　全集（註(2)）第二巻、九〇頁。

(19)　アウグスティーヌス『告白』（トイブナー古典叢書一九三四年初版）再版一九六九年、三七一頁（第一三巻、第三八章）。

私達は汝の神聖な偉容に安らわんと待ち望む。汝は　…　常に安らぎてある。なぜなら（神よ）、汝の安らぎは汝自身なのだから（tua quies tu ipse es.）。

(20)　ニーチェ『音楽の精髄から悲劇の誕生』（一八七二年）。註(1)全集、第三部、第一巻、一九七二年、一七頁（初版表題）。註(81)参照。

(21)　ヘルダーリン『ドイツの歌』第十五句―第二〇句。註(2)全集、第二巻、二〇二頁。

一五　　そして緑濃き木蔭に深く坐し、
また頭の上で微風に楡の木立ちが戦ぐと、
涼しく息吹く小川に佇ずみドイツの詩人は
かつ歌うのだ、もし明鏡の水面から
しかと飲みほすと、遠い彼方へと静聴する耳をそばだて、
二〇　魂の歌声を（奏でるのだ）。

〔c〕「月夜」

(22)　全集（註(2)）第二巻、九〇頁。

(23)　『純粋理性批判』（一七八一年）再版（一七八七年）六七一頁。カント作品集、プロイセン学士院版に依る写真複刻版、一九六八年、第三巻、四二七頁。

(24)　作品集（註(23)）第三巻、四二六頁。原典再版六七〇頁。

(25)　作品集（註(23)）第三巻、七頁。『純粋理性批判』初版（一七八一年）序言Ⅶ頁。

(26)　「離在」の詳細は、筆者の別論（註(8)）『「離在」と「噴泉」』一六頁―二一頁参照。

〔d〕「星辰」

(27)　ハラー『スイス詩歌の試み』再版一七三四年。レクラム文庫『ハラー詩選（ヒルツェル編一八八二年版『ハラー詩集』に依る）』一九六五年、七三頁。

(28)　全集（註(2)）第二巻、九五頁。

(29)　『パンとぶどう酒』第四節、第五五句。註(2)全集、第二巻、九一頁。

至福なるギリシアよ！　汝あらゆる神々の住居よ！

(30)　『パンとぶどう酒』第四節、第六二句―第六五句。註(2)全集、第二巻、九二頁。

…　かの偉大なる運命が轟き、

…　かの神速の運命が砕け、普遍の幸に満ち、
　雷鳴とともに清澄なる大気から、眼界を過り突入して来る。
六五　父なる神気（アイテール）よ！　…

(31) 例えば『ヘルダーリンのエレギー『パンとぶどう酒』』（註(4)）四〇頁では、「夜」に関し「真正な自然神話（ein echter Naturmythos）」など専ら修辞上の文飾が話題とされている。

(32) 作品集（註(23)）第一巻、三六五頁。

(33) シュテーリヒ『西洋科学史』（初版一九五四年）一九六五年版より和訳（社会思想社、現代教養文庫）第三巻「理性の時代、数学的世界像の形成と啓蒙主義」一九七五年（菅井準一／長野敬／佐藤満彦共訳）六七頁―七〇頁。原典第四版、一九七〇年、第一巻、三二八頁―三三〇頁。

　全世界が、力学の法則に従うただ一個の機械なのだ！　続く二世紀間の物理学は、ニュートンのすえた基礎の上にさらに築かれ続けていった。　…　ニュートンの方法が成功した裏には、本質的なものへの問いを打切るという制限をしたからこそかえって可能となった、という一面が強い。このことは、『プリンキピア』（一六八七年）の初めにたてある出発点の定義を調べてみれば、すぐわかる。　…　ニュートンの命題が真に意味しているのは、どの物体にもそれぞれ、質量と呼んでよいような一定の量がある、という仮定にすぎない。
　他の前提についても、同じようなものだ。それらは出発点となる仮定、公理なのであって、証　（六七頁／六八頁）　明の必要はないように思われる。少なくともニュートンにはそう思われた。　…　すなわち、ニュートンの公理はそれ自体として自明なものではないのである。全体の土台をなす根本概念である空間、時間、位置および運動については、とくにそういってよい。
　ニュートンは**絶対**時間と**相対**時間とを区別した。
　絶対的な真の数学的時間は　…
空間についても、同じような区別が設けられている。
　絶対空間は、…　（六八頁／六九頁）
最後に運動についても、
　絶対運動とは、…　（六九頁／七〇頁）
　地球は太陽のまわりを動き、太陽は銀河系の中を動き、銀河もまた全宇宙の中をものすごい速さで動いているとすれば、いったい〝絶対〟空間をどこに見いだしたらよいのか、ということだけが問題なのである。全宇宙は、ニュートンにはまだ知られていなかった。世界空間のどこかはるかかなたに実際に巨大な質量があって、他のすべての運動はこのものの絶対静止を基準にして測定される、と彼は考えていた。　…

(34) 所謂ピュータゴラース派に由来する「天界の諧音」は、例えばポープの教訓詩『人間論』第一書簡（一七三三年）第二〇二句（the music of spheres）に見られる。マクミラン英文古典叢書『人間論』（初版一八九五年）一九一九年、九頁。

(35) 作品集（註(23)）第五巻、一六一頁。

(36) 一五四五年版ルター訳『聖書』原典複刻写真版、シュトゥットガルト、ドイツ聖書協会刊、一九六七年／八三年、前篇、二九一頁。
　引用に際し省略した箇所には「汝（神）の指の業（わざ）」（第三節）として「天空」が把えられており、唯一絶対者の被造物として宇宙が考えられる。すると数学の公理のような絶対空間とか絶対時間あるいは絶対運動（註(33)）の必然として世界が了解される道が開かれるのであるが、こうなると人間存在の自由の問題などを始めとする「本質的なものへの問いを打切るという」（註(33)）ことにならざるを得ない。

(e) 「理想と人生」

(37) 全集（註(2)）第三巻、一四三頁。

(38) 『古代ギリシア模倣論』第八八章。一八二五年／二八年刊一二巻ヴィンケルマン全集、複刻一九六五年、第一巻、三四頁。

(39) 一九二五年刊二五部レッシング作品集、二五巻、一九七〇年複刻、第四巻、第四部、四〇九頁。岩波文庫『ラオコオン』斎藤栄治訳、一九七〇年、三一七頁。

(40) 『幽魂の国』第一節、第一句。ヴァイマール版シラー全集、第一巻、一九四三年、二四七頁。『理想と人生』第一節の第一句（Ewigklar und spiegelrein …）は、同全集、第二巻、第一部、一九八三年、三九六頁。

（41）　全集（註(2)）第三巻、一四三頁。
（42）　全集（註(40)）第二巻、第一部、三九八頁。『幽魂の国』第十一節、第一〇七句―第一一〇句（全集、第一巻、二五〇頁）に相当。
（43）　『理想と人生』第一五節、第一四五句―第一四六句（註(40)全集、第二巻、第一部、四〇〇頁）。『幽魂の国』第一八節、第一七五句―第一七六句（同全集、第一巻、二五一頁）。
（44）　プレヤード版『ヘルダーリン作品集』一九六七年、八〇八頁。

〔f〕「聖夜」

（45）　『婚礼前のエミーリア』第三〇句。全集（註(2)）第一巻、二七八頁。
（46）　全集（註(2)）第二巻、九三頁。
（47）　『パンとぶどう酒』の中観キリスト像に関する詳細は、筆者の別論『ヘルダーリンの西欧ギリシア論』（註(7)）の〔二〕(7)（第三四巻、七頁―二〇頁）および〔三〕(10)（第三五巻、二頁―一四頁）を参照されたい。
（48）　全集（註(2)）第二巻、九四頁。

〔g〕「探求」と「吟味」

（49）　全集（註(2)）第三巻、一八四頁。
（50）　一五四五年『聖書』（註(36)）後篇、二四九頁。
（51）　全集（註(2)）第二巻、九五頁。

〔h〕「直観」と「探求」

（52）　全集（註(2)）第三巻、二〇九頁。
（53）　ヘーゲル作品集、一八三二年―四五年版作品集を底本、一九六九年―七一年（索引一九七九年）、第一巻、二三二頁。註(2)ヘルダーリン全集、第七巻（資料篇）第一部、二三五頁。引用は以下、草稿に忠実な註(2)全集より。
　此所でヘーゲルが「密儀にて聖化されし者」は「告げ知らせてはならぬ」と語る時、この典拠は『ホメーロス讃歌』（希独対訳トゥスクルム古典叢書、第三版、一九七〇年）六頁―三三頁所収『デーメーテールへの讃歌』（岩波文庫『四つのギリシア神話』一九八五年、一〇頁―四九頁、片山英男訳）の第四七〇句―第四八四句（原典三二頁、独訳三三頁、和訳四七頁―四八頁）と考えられる。
　こう言うと、見事な冠のデーメーテールはそれに従い、直ちに肥沃な畑から実りを萌えさせた。
　広い大地には葉と花が一面に咲きほこった。すると女神は法の守り手たる王たちのところに行って、トリプトレモスと馬を駆けるディオクレースと力優れたエウモルポスと人々の導き手ケレオスに、祭儀の執り行い方を教え、またトリプトレモスとポリュクセイノスと、加えてディオクレースの一同に、秘儀を明かした。これは聴くことも語ることも許されぬ、侵すべからざる神聖な秘儀であり、神々に対する大いなる畏れが声を閉じこめてしまう。
　幸いなるかな、大地に住まう人間の中でこの秘儀を目にした者よ。参入を許されず、祭儀に与かれぬ者が、死して後、闇覆う冥界で同じ定めに与かるべくもない。
　尊い女神のデーメーテールは教えをすべて告げられると、娘神ともどもオリュンポスへおもむき、他の神々の仲間に加わった。
（54）　全集（註(2)）第三巻、三二頁（第七書簡）。
　おお天からの雨よ！　おお霊感よ！　汝は諸民族の新春を私達に再びもたらすであろう。　…　汝の到来は全能の歓喜とともに、黄金色の雲に私を包み、不滅の高みへと運ぶであろう。すると私達は驚嘆し反問するのだ。「私達はかつての心貧しいままなのか？」と。かつては星辰に向かい尋ねたのだった。「星辰の彼方に私達の新春が萌えるのだろうか？」と。それは時の寵児、この上なく若々しく美しき時の娘、新たな教会（die neue Kirche）が、この汚れ老い朽ちた諸形態の中から誕生し、神性に目覚めた感情が人間に新生を人心に麗しい青春を再来させる時なのだ。…
（55）　全集（註(2)）第七巻、第一部、二三四頁。作品集（註(53)）第一巻、二三一頁。
（56）　全集（註(2)）第七巻、第一部、二三四頁。作品集（註(53)）第一巻、二三〇頁―二三一頁。
（57）　全集（註(2)）第三巻、五二頁―五三頁。

(58) 全集（註(2)）第三巻、一四頁。
(59) 全集（註(2)）第七巻、第一部、二三五頁。作品集（註(53)）第一巻、二三二頁。
(60) 全集（註(2)）第七巻、第一部、二三四頁―二三五頁。作品集（註(53)）第一巻、二三二頁。
(61) 全集（註(2)）第七巻、第一部、二三五頁。作品集（註(53)）第一巻、二三二頁。
(62) 全集（註(2)）第三巻、八一頁。
(63) 全集（註(2)）第三巻、八三頁。同旨はヘーゲルやヘルダーリンたちの交友圏より誕生した『ドイツ観念論体系草稿』（一七九六年）で次のように叙述されている。全集（註(2)）第四巻、二九七頁―二九九頁。作品集（註(53)）第一巻、二三四頁―二三六頁。引用は以下、草稿に忠実な註(2)全集より。

自意識ある自由な本質とともに同時に新たな世界が――無から誕生する。――この無からの創造（Schöpfung aus Nichts）は考え得る唯一の真正な創造である。…（二九七頁／二九八頁）…最後に一切を統一するのは、プラトーン哲学の高次な意味における美の理念（die Idee der Schönheit）である。哲学者は正に詩人と同様、美を摑む力（ästhetische Kraft）を所有せねばならない。美意識の無い人間は、文字面に拘泥する我らの哲学学者（unsre Buchstaben Philosophen）である。精神哲学は美の哲学（eine ästhetische Philosophie）である。美意識を欠けば、精神の豊かさは無くなり、歴史についてさえ精神豊かに論述できない。…詩文は故に一層と崇高な尊厳を獲る。詩文は終始不変であり、人類の教師である。なぜなら、哲学や歴史が存在しなくなろうとも、詩歌芸術のみ（die Dichtkunst allein）は他のあらゆる諸学芸よりも生きのびるからである。…（二九八頁／二九九頁）…天上から高次な精神が送られ、我々の下にこの新たな（美の）宗教を樹立せねばならない。

以上の「ドイツ観念論体系草稿」の思想の礎は多分にシラーに負うものと思われ、その「哲学精神」と「理想化技法」に此所では留意しておきたい。まず前者に関しては「イェーナ大学就任講義」（一七八九年）にこうある。

哲学精神（der philosophische Geist）は世界史の素材のもとに長くは留まらず、やがて新たな衝動が哲学精神において働きだし、調和一致を希求し――この衝動が抗し難く哲学精神をそそり、自らを取り巻く一切を哲学精神固有の自然本性に相応しくさせ、そして自らに立ち現われる現象を哲学精神自らが認識した至高の成果、すなわち思想（Gedanke）へと高めるのである。

（註(40) シラー全集、第一七巻、一九七〇年、三七三頁）

更に「理想化技法」に関しては、『ビュルガーの詩歌について』（一七九一年）において、「詩歌芸術のみ」の観点の下で話題となる。註(40) シラー全集、第二二巻、一九五八年、二四五頁／二五三頁。

知識圏の拡大と職種の分業化が必然としてもたらした、私達の精神諸力の個別化と断片的有効性に際して、それはまず詩歌芸術のみ（die Dichtkunst beinahe allein）である、魂の分離された諸力を再び協和一致へともたらし、頭脳と心、洞察と創意、理性と想像力とを調和ある盟約の下で活動させ、言わば全き人間を私達の中に生み出すのは。…（二四五頁／二五三頁）…詩人に要請される必要条件の一つが、理想化であり、気高くすることであり、これなくしては詩人の名に値しなくなる。詩人に相応しいことは、自らの対象の卓抜性を…粗雑で少くとも異質な玉石混淆から解放し、様々な諸対象に散在せる完全性の光を、或る唯一の光のもとに集めることである。…この理想化技法（Idealisierkunst）がビュルガー氏に見られないのを私達は遺憾とするのである。

(64) 全集（註(2)）第七巻、第一部、二三五頁。作品集（註(53)）第一巻、二三一頁。

ヘーゲルの『エレウシース』では、第五九句で「探求者が知恵を（既存のものとして）所有している」とか、第六〇句で「知恵を物にするために、探求者が言葉を穿鑿する」（註(61)）とか語られているけれども、これが「知恵の探求」（註(60)）そのものの放棄でないことは本論に述べた通りである。因みに既成事実の情報にへばりつき「探求者が言葉を穿鑿する」に終始し、結局は「探求者が知恵を（既存のものとして）所有

している」に過ぎなくなる趨勢に抗して、ヘーゲルの念頭にあったのは恐らく『ひとつの答弁（Eine Duplik）』（一七七八年）における次のレッシングの言葉であろうと思われる。

人間の価値は、その人間が所有している真理、あるいは所有していると思っている真理にではなく、真理に到達するために彼が耐え忍んだ誠実な努力にある。というのも、彼の力は、所有によってではなく、真理の探求（die Nachforschung der Wahrheit）によって増すからであり、彼の完全性が絶えず成長するのは、真理のかかる探求によるからである。所有（Der Besitz）は沈滞させ、怠惰にし、傲慢にする――

もしも神が右手にあらゆる真理を（Wenn Gott in seiner Rechten alle Wahrheit）、…

（註(39) 作品集、第一九巻、第二三部、五八頁。『理性とキリスト教（レッシング哲学・神学論文集）』谷口郁夫訳、新地書房、一九八七年、三二頁）

(65) 全集（註(2)）第七巻、第一部、二三四頁。作品集（註(53)）第一巻、二三一頁。

(66) 『パンとぶどう酒』第七節、第一二二句。全集（註(2)）第二巻、九四頁。註(9) 参照。

〔i〕

「浪漫（ロマン）化」

(67) シェリング作品集、六巻本、一九二七年（第一巻―第四巻）／一九二八年（第五巻―第六巻）、第二巻、六二五頁。原典版、第三巻、六二五頁。

(68) ノヴァーリス著作集、四巻本、一九二九年、第二巻、四一一頁、「詩歌は　…」。第二巻、三三五頁、「世界は浪漫（ロマン）化　…」。

(69) ディルタイ著『体験と創作』（一九〇五年）に見られるような作家論本位の在来の研究動向を不十分と批判し、むしろ『夜の讃歌』と『パンとぶどう酒』という具体的な作品を比較検討することにより両詩人の詩歌象徴を論じた労作として、大友進著『ヘルダーリン・ノヴァーリス研究（専修大学『専修人文論集』第二八号／第二九号／第三一号／第三二号、一九八二年三月／六月／一九八三年八月／一九八四年三月刊、四五頁―六五頁／一一七頁―一五二頁／三七頁―六六頁／二五頁―六七頁所収）がある。蓋し当論では『パンとぶどう酒』第一節に関して、「『讃歌』で概念的抽象的又は比喩的語句を用いて表現されたものを、具体的な諸々の個物を用い、具体的な形象として描く」（第二八号、六二頁）ことが論証されているに留まり、残念ながらそれ以上に立ち入った内容考察は繰り広げられていない。

(70) 著作集（註(67)）第一巻、五六頁（第一歌）。

(71) 館野日出男『「夜の讃歌」における再生の理念』（上智大学『ドイツ文学論集』第一七号、一九八〇年、一〇五頁―一一九頁所収）一〇六頁／一一六頁。

「夜の讃歌」は、「夜」そのものの讃歌ではない。「夜」を通りぬけることによって啓けてくる再生の場にたいする讃歌である。…（一〇六頁／一一六頁）　…　「夜の太陽」とは、「夜」に象徴される死の意識の果てに現出する再生の象徴である。

「夜の太陽」をこの様な未来へ向けての理念追求の筋で摑む時に、正に『パンとぶどう酒』の「至福なるギリシア」（註(29)）と響き合う共鳴弦が確かめられ得ると思われる。

(72) 著作集（註(67)）第一巻、五五頁（第一歌）。

(73) 著作集（註(67)）第一巻、五六頁（第一歌）。

(74) 著作集（註(67)）第一巻、六三頁（第五歌）。

〔j〕

「人倫（エートス）」

(75) ノヴァーリス『青い花』（一七九九年―一八〇一年）第二章。註(68) 著作集、第一巻、一〇九頁。

(76) 『青い花』（註(75)）第二章。第一巻、一一〇頁。

(77) ノヴァーリス『キリスト教世界あるいは西欧』（一七九九年）。著作集（註(67)）第二巻、七六頁―八四頁。

(78) カルーズー著『（ギリシア）国立考古学博物館』案内（一九七七年）仏訳版（一九八一年）五七頁（挿絵）／五八頁（説明）。

今日五〇〇ドラクマ紙幣にも印刷されているほど著名なこの「エレウシースの浮彫」に関し、岩波新書版澤柳大五郎著「ギリシアの美術」（一

九六四年）には挿絵（一八八頁）が収められてあるものの、残念ながら立ち入った説明が当該箇所（一九八頁）に見い出されない。他方アルテミシオンのポセイドーン像は当新書で絶賛され「Ethos … ギリシア人のエトスという言葉の内容はどんな辞書にも勝ってこの像を見ることによって直接に感じられる」（一四七頁）とまで言われている。翻って考えてみるに、ソークラテース存命中（前四六九年―三九九年）に成る神像（前四六〇年―四五〇年）と浮彫（前四四〇年―四三〇年頃）ともに、正に「人倫（Ethos）の偉容」（註(93)）を映す古典の鏡と看做して差し障りないのではあるまいか。

(79) ヘーゲル作品集（註(53)）第一四巻、六六頁。和訳は「歴史哲学」（註(80)）中巻、三二五頁。

(80) ヘーゲル作品集（註(53)）第一二巻、二九二頁―二九三頁。岩波文庫『歴史哲学』武市健人訳、全三巻一九七一年刊、中巻、一二六頁。

(81) 全集（註(1)）第三部、第一巻、一九七二年、三七頁。註(20)参照。

(82) ヘーゲル作品集（註(53)）第一二巻、一三四頁。『歴史哲学』（註(80)）上巻、二一八頁。

(83) ハイム『浪漫派』（初版一八七〇年）第三書「浪漫主義最盛期」第一章（二八九頁―三二四頁）のヘルダーリン論（第四版一九二〇年、三四一頁―三七六頁）の表題（初版二八九頁、第四版三四一頁）が「浪漫詩文の傍系」である。

(84) 著作集（註(67)）第一巻、五五頁。

(85) ヘルダーリン『詩歌と断片』（ハンバーガー英訳）ケムブリッジ大学出版局、一九八〇年、二四三頁。

話題の「（燈火と月影の）光が満ち」に関しての詳細は、筆者の別論二点（註(8)、『パンとぶどう酒』冒頭の都市像、および『内省と光明』）を参照されたい。

例えば『冒頭の都市像』論、（三）市民、(2) Erleuchtung（四二頁―四九頁）では、「第一句後半の《Erleuchtung》を『窓辺の光（lumières aux fenêtres）』と解するならば、この光明は、人の住居により近く、心の内を点す燈火として映えてくるのではなかろうか」（四三頁）となど考量しつつ、「ひとえに燈火の光を英訳のように具体的に想像するに留まらず、更により広い関連へとかかわる」（四四頁）よう論述が進めてあり、更に別論『内省と光明』（三）燈火と松明 (2)燈火と月影（一七一頁―一七六頁）において、「月影」が「仮象」である点も加味して考察が繰り広げられている。

(86) 全集（註(2)）第四巻、一五一頁。

(87) ヘーゲル『精神現象学』序論。註(53)作品集、第三巻、三六頁。

(88) 『ギリシアの神々』初稿、第二五節、第一九三句―第二〇〇句（最終詩節）。註(40)全集、第一巻、一九五頁。

汝の光輝が私を打ち拉ぐ
知性の業にして、知性の創造主よ！ 汝を
求め格闘せんため私に翼を与えよ、秤を（与えよ）
汝を量るため――あるいは私から除いてくれ、
厳そかで苛酷な女神を再び除いてくれ、
（明）鏡を眩むばかりに私の（眼）前に突きつける（この真理の）
女神の優しき妹（美の女神）を（むしろ）降臨させ、
姉は別世界に取っておいてくれ。

(89) ヘーゲル作品集（註(53)）第三巻、三六頁。

(90) 『理想と人生』第一〇節、第九八句―第九九句（註(40)全集、第二巻、第一部、三九九頁）。『幽魂の国』第一三節、第一二八句―第一二九句（註(40)全集、第一巻、二五〇頁）。

(91) 全集（註(2)）第二巻、九一頁。

(92) 全集（註(2)）第七巻、第一部、二三三頁。作品集（註(53)）第一巻、二三〇頁。

(93) シラー『ドイツの偉容』。全集（註(40)）第二巻、第一部、四三一頁。ドイツ人の威厳は決して王侯の頭上に存しなかった。政治上の価値を遠離し、ドイツ人は自ら固有の価値を樹立した。縦んば（神聖ローマ）帝国が滅んだとて、ドイツの尊厳は揺らがず悠然と留まろう。その尊厳は人倫の偉容であり、それが住まうのはその国の文化と気質なのである。 … この（精神）王国がドイツに花咲き、溢れる生育を示す。そして野蛮な旧（封建）体制のゴティック式遺跡（つまり教会建築）の下で、活ける生命が伸び伸びと育くまれるのだ。

(94)『エレウシースの祝祭』第二六節、第二〇五句―第二〇八句（註(40)全集、第二巻、第一部、三八二頁）。『市民の歌』第二六節、第二〇五句―第二〇八句（註(40)全集、第一巻、四三二頁）。
(95)全集（註(40)）第一七巻、一九七〇年、三七七頁。
(96)全集（註(95)）第一七巻、三八五頁。
(97)全集（註(95)）第一七巻、三九六頁。
(98)全集（註(40)）第一巻、二〇三頁。
(99)『精神現象学』、註(53)作品集、第三巻、二六四頁。話題の「人倫の国」としての古代ギリシアに関しては、別にヘーゲルの『歴史哲学』における次の論述が参考となる。註(53)作品集、第一二巻、二九三頁。註(80)和訳『歴史哲学』中巻、一二七頁。

ギリシアの精神は好奇心と驚異とから出発して、だんだんと意味の措定に進んで行く。この統一は主観そのものの面でも生ずる。人間の中でその自然的な面といえば、心情、性癖、情熱、気質であるが、これらはいまや精神的に陶冶されて自由な個性となる。その結果、〔各個人の〕性格は普遍的な人倫の力に対して義務関係に立つのではなく、むしろ人倫的なもの（das Sittliche）がそのまま〔個人的〕感覚と個別的、特殊的な主観性の固有の存在（Sein）であり、意欲（Wollen）であることになる。まさにこの点こそ、ギリシアの性格を美わしい個性（schöne Individualität）となしている所以なのであって、精神は自然的なものを変容して自分の表現とすることによって、この美わしい個性を産出したのであった。

一　静かに安らう都市。ひそやかに街路には（燈火と月影の）光が満ち、
二　　して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。
三　満ち足りて家路へと、昼間の歓びに別れを告げ、安らぎを求め歩みゆく
　　人々。
四　　して収支得失を慮る思慮深い家長は
五　悠然と和やかにわが家にくつろぐ。（黄昏の今は）葡萄も花束もなく、
六　　して手仕事の品々もなく安らう、（昼間は）忙しき広場の市場。
七　だが他方、竪琴の音が彼方の庭園から響いて来る。恐らくは
八　　そこで恋人が奏で、或いは孤独な者が
九　彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が
一〇　滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ迸り、芳香に匂う花壇を霑してい
　　る。
十一　ひそやかに黄昏の夜気に響き渡る晩鐘の音
十二　　して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばわる。
十三　今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を（天上へと）揺り動かす。
十四　　見よ！　して我らの大地の影像たる月も
十五　また秘蔵の荘厳より解き放たれ、霊気溢れる夜が到来する。
十六　　星辰に輝きみち（清澄な）夜は、恐らく私達などまず配慮もせず。
十七　彼方で光明を放ち、驚嘆させ、人間では異邦の者として
十八　　山頂の上高く、悲愴かつ壮麗に立ち現われる。
（『パンとぶどう酒』一八〇〇年―〇一年、第一節、第一句―第十八句）

Und allein durch seine Sitte
Kann er frei und mächtig seyn.

Vgl. Schiller „Das Eleusische Fest" Str.26. V.201-208: Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil 1. S.382.

Freiheit liebt das Thier der Wüste,
Frei im Aether herrscht der Gott,
Ihrer Brust gewalt'ge Lüste
Zähmet das Naturgebot,
Doch der Mensch, in ihrer Mitte, 205
Soll sich an den Menschen reih'n,
Und allein durch seine Sitte
Kann er frei und mächtig seyn.

95)Schiller „Die Sendung Moses"(1790): Weimarer Nationalausgabe. Bd.17. 1970. S.377/S.384f./S.396f.

Ja in einem gewissen Sinne ist es unwiderleglich wahr, daß wir der Mosaische Religion einen großen Theil der Aufklärung danken, deren wir uns heutiges Tags erfreuen. Denn durch sie wurde eine kostbare Wahrheit, welche die sich selbst überlassene Vernunft erst nach einer langsamen Entwicklung würde gefunden haben, die Lehre von dem Einigen Gott, vorläufig unter dem Volke verbreitet, und als ein Gegenstand des blinden Glaubens so lange unter demselben erhalten, bis sie endlich in den helleren Köpfen zu einem Vernunftbegriff reifen konnte. ... (S.377/S.384) ... Diese Ceremonien, mit jenen geheimnißvollen Bildern und Hieroglyphen verbunden, und die verborgenen Wahrheit, welche in diesen Hieroglyphen versteckt lagen, und durch jene Gebräuche vorbereitet wurden, wurden zusammengenommen unter den Nahmen der (S.384/S.385) Mysterien begriffen. Sie hatten ihren Sitz in den Tempeln der Isis und des Serapis und waren das Vorbild, wornach in der Folge die Mysterien in Eleusis und Samothrazien, und in neuern Zeiten der Orden der Freymaurer sich gebildet hat. ... (S.385/S.396) ... Moses der selbst aus diesem Zirkel ist, und nur diesem Zirkel seine bessere Idee von dem höchsten Wesen zu danken hat, Moses ist der Erste der es wagt, dieses geheimgehaltene Resultat der Mysterien nicht nur laut, sondern sogar zur Grundlage eines Staats zu machen. Er wird also, zum Besten der (S.396/S.397) Welt und der Nachwelt, ein Verräther der Mysterien, und läßt eine ganze Nation an einer Wahrheit Theil nehmen, die bis jetzt nur das Eigenthum weniger Weisen war. ...

96) Vgl. (V(5)95)

97) Vgl. (V(5)95)

98)Schiller „Die Künstler"(1789) Str.7. V.84-85: Weimarer Nationalausgabe. Bd.1. S.203.

ihr Lichtpfad, schöner nur geschlungen, senket
sich in die Sonnenbahn der Sittlichkeit.

99)Hegel „Phänomenologie des Geistes" C Vernunft. B: Werke(V(5)53). Bd.3. S.264.

... das Reich der Sittlichkeit ...

Vgl. Hegel „Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte" II.Teil. 1. Abschn.(V(5)80): Werke(V(5)53). Bd.12. S.293.

Von Ahnung und Verwunderung geht der griechische Geist aus und geht dann weiter zum Setzen der Bedeutung fort. Auch am Subjekte selbst wird diese Einheit hervorgebracht. Am Menschen ist die natürliche Seite das Herz, die Neigung, die Leidenschaft, die Temperamente; diese wird nun ausgebildet zur freien Individualität, so daß der Charakter nicht im Verhältnis zu den allgemeinen sittlichen Mächten, als Pflichten, steht, sondern daß das Sittliche als eigentümliches Sein und Wollen des Sinnes und der besonderen Subjektivität ist. Dies macht eben den griechischen Charakter zur schönen Individualität, welche durch den Geist hervorgebracht ist, indem er das Natürliche zu seinem Ausdruck umbildet. ...

V(5)89-94

89)Hegel „Phänomenologie des Geistes" Einleitung"(V(5)87)
90)Schiller „Das Ideal und das Leben" Str.10. V.98-100; Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil 1. S.399: „Das Reich der Schatten" Str.13. V.128-130; Weimarer Nationalausgabe. Bd.1. S.250.

Ueber diesen grauenvollen Schlund
Trägt kein Nachen, keiner Brücke Bogen,
Und kein Anker findet Grund. 100 / 130

91)Hölderlin „Brod und Wein" Str.2. V.27-36: Stuttgarter Ausgabe. Bd.2. S.91.

Oder es blikt auch gern ein treuer Mann in die Nacht hin,
Ja, es ziemet sich ihr Kränze zu weihn und Gesang,
Weil den Irrenden sie geheiliget ist und den Todten,
Selber aber besteht, ewig, in freiestem Geist. 30
Aber sie muß uns auch, daß in der zaudernden Weile,
Daß im Finstern für uns einiges Haltbare sei,
Uns die Vergessenheit und das Heiligtrunkene gönnen,
Gönnen das strömende Wort, das, wie die Liebenden, sei,
Schlummerlos und vollern Pokal und kühneres Leben, 35
Heilig Gedächtniß auch, wachend zu bleiben bei Nacht.

Vgl. Hölderlin „Le Pain et le vin"(V(5)2) vers 27-36: OEuvres. S.809.

Et l'homme au coeur fidèle aime à plonger les yeux dans la nuit pure.
Qu'on lui dédie, ainsi qu'il sied, des chants et des couronnes!
Car elle est le trésor sacré des insensés et des morts,
Et perdure, elle-même éternel esprit pur de contrainte. 30
Mais qu'elle aussi (car il le faut, afin qu'en notre lent séjour
Dans cette ombre, quelque chose nous soit gardé qui nous conforte)
Qu'elle aussi nous donne l'oubli, qu'elle aussi nous donne l'ivresse
Sacrée et le jaillissement du verbe! et qu'ainsi, comme des amants,
Yeux jamais clos, coupes à pleins bords, audace à vivre et sainte 35
Souvenance, nous traversions la nuit au comble de l'éveil.

92)Hegel „Eleusis" V.1-4: Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe. Bd.7. 1. S.233; Hegel-Werke(V(5)53). Bd.1. S.230.

Um mich, in mir wohnt Ruhe, — der geschäftgen Menschen
nie müde Sorge schläft, sie geben Freiheit
und Musse mir — Dank dir, du meine 3
Befreierin o Nacht! — ...

93)Schiller „Deutsche Größe"(1797): Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil 1. S.431.

Die Majestät des Deutschen ruhte nie auf dem Haupt s. Fürsten. Abgesondert von dem politischen hat der Deutsche sich einen eigenen Werth gegründet und wenn auch das Imperium unterginge, so bliebe die deutsche Würde unangefochten. ... Sie ist eine sittliche Größe, sie wohnt in der Kultur u: im Charakter der Nation, der von ihren politischen Schicksalen unabhängig ist. — Dieses Reich blüht in Deutschland, es ist in vollem Wachsen und mitten unter den gothischen Ruinen einer alten barbarischen Verfaßung bildet sich das Lebendige aus. (Der Deutsche wohnt in einem alten sturzdrohenden Hauß aber er selbst ist ein edler Bewohner, und indem das politische Reich wankt hat sich das Geistige immer fester und vollkommener gebildet.) ...

94)Schiller „Bürgerlied"(„Musenalmanach" 1799) Str.26. V.201-208: Weimarer Nationalausgabe. Bd.1. S.432.

Freiheit liebt das Thier der Wüste,
Frei im Aether herrscht der Gott,
Ihrer Brust gewaltige Lüste
Zähmet das Naturgebot,
Doch der Mensch, in ihrer Mitte, 205
Soll sich an den Menschen reihn,

84) Vgl. (V(5)70).

85)Hölderlin „Bread and Wine" lines 1-2: Poems & Fragments. Deutsch nach der Stuttgarter Ausgabe / Englisch nach Hamburger, Michael. Cambridge Univ. Press. 1980. S.243.

Round us the town is at rest; the street, in pale lamplight, grows quiet
And their torches ablaze, coaches rush through and away.

Vgl. Takahashi, Katsumi: Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein" (Forschungsberichte der Universität Kôchi für das Jahr 1983. Vol.32. Geisteswissenschaften. S.21-70 / VERINNERLICHUNG UND ERLEUCHTUNG — Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein". ‚Heilige Nacht'. Erster Teil (Forschungsberichte der Universität Kôchi für das Jahr 1985. Vol.34. Geisteswissenschaften. S.155-201).

86)Hölderlin „Grund zum Empedokles"(1799): Stuttgarter Ausgabe. Bd.4. S. 151.

Die Fremden Formen müssen um so lebendiger seyn, je fremder sie sind, und je weniger der sichtbare Stoff des Gedichts dem Stoffe der zum Grunde liegt, dem Gemüth und der Welt des Dichters gleicht, um so weniger darf sich der Geist, das Göttliche, wie es der Dichter in seiner Welt empfand, in dem künstlichen fremden Stoffe verläugnen. ...

Vgl. „Fondement d'Empédocle"(Traduction par Naville, Denise): OEuvres(V(5)2). S.658.

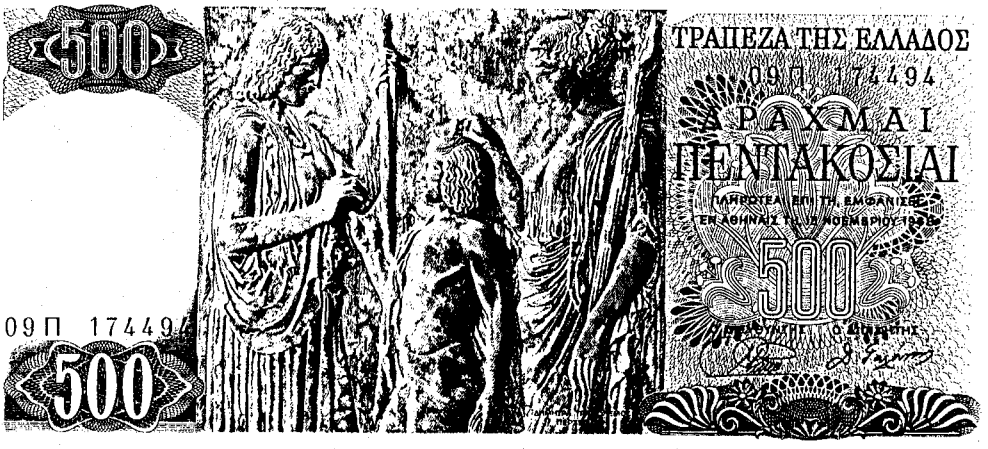
Les formes étrangères doivent être d'autant plus vivantes qu'elles sont plus étrangères; et moins la matière manifeste du poème ressemblera à la matière sur laquelle elle se fonde, à l'âme et à l'univers du poète, moins l'esprit, l'élément divin, tel que le poète l'avait éprouvé dans son univers, devra se renier dans la matière artistique étrangère. ...

87)Hegel „Phänomenologie des Geistes"(1807) Einleitung: Werke(V(5)53). Bd. 3. S.36.

Die Tätigkeit des Scheidens ist die Kraft und Arbeit des Verstandes, der verwundersamsten und größten oder vielmehr der absoluten Macht. Der Kreis, der in sich geschlossen ruht und als Substanz seine Momente hält, ist das unmittelbare und darum nicht verwundersame Verhältnis. Aber daß das von seinem Umfange getrennte Akzidentelle als solches, das Gebundene und nur in seinem Zusammenhange mit anderem Wirkliche ein eigenes Dasein und abgesonderte Freiheit gewinnt, ist die ungeheure Macht des Negativen; es ist die Energie des Denkens, des reinen Ichs. Der Tod, wenn wir jene Unwirklichkeit so nennen wollen, ist das Furchtbarste, und das Tote festzuhalten das, was die größte Kraft erfordert. Die kraftlose Schönheit haßt den Verstand, weil er ihr dies zu mutet, was sie nicht vermag. Aber nicht das Leben, das sich vor dem Tode scheut und von der Verwüstung rein bewahrt, sondern das ihn erträgt und in ihm sich erhält, ist das Leben des Geistes. Er gewinnt seine Wahrheit nur, indem er in der absoluten Zerrissenheit sich selbst findet. Diese Macht ist er nicht als das Positive, welches von dem Negativen wegsieht, wie wenn wir von etwas sagen, dies ist nichts oder falsch, und nun, damit fertig, davon weg zu irgend etwas anderem übergehen; sondern er ist diese Macht nur, indem er dem Negativen ins Angesicht schaut, bei ihm verweilt.

88)Schiller „Die Götter Griechenlandes" 1.Fas. 1788. Str.25. V.193-200: Weimarer Nationalausgabe. Bd.1. 1943. S.195.

Dessen Stralen mich darnieder schlagen,
Werk und Schöpfer des Verstandes! dir
nach zu ringen, gib mir Flügel, Waagen 195
dich zu wägen — oder nimm von mir
nimm die erste strenge Göttin wieder,
die den Spiegel blendend vor mir hält;
Ihre sanft're Schwester sende nieder,
spare jene für die andre Welt. 200



79)Hegel „Vorlesungen über die Ästhetik" II.Teil. Abschn.2. Kap.1: Werke(V(5)53). Bd.14. S.66.

... Doch scheint im ganzen in den Mysterien keine große Weisheit oder tiefe Erkenntnis verborgen gewesen zu sein, sondern sie bewahrten nur die alten Traditionen, die Grundlage des später durch die echte Kunst Umgebildeten auf und hatten deshalb nicht das Wahrhafte, Höhere, Bessere, sondern das Geringere und Niedere zu ihrem Inhalt. Dies Heiliggehaltene wurde in den Mysterien nicht klar ausgesprochen, sondern nur in symbolischen Zügen überliefert. ...

80)Hegel „Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte"(1.Aufl. 1837) II.Teil. Die griechische Welt. 1.Abschn. Die Elemente des griechischen Geistes: Werke(V(5)53). Bd.12. S.292-293.

Die Mysterien waren nur solche alten Anfänge und enthielten sicherlich keine größere Weisheit, als schon im Bewußtsein der Griechen lag. Alle Athener waren in die Mysterien eingeweiht, und nur Sokrates ließ sich nicht initiieren, weil (S.292/S.293) er wohl wußte, daß Wissenschaft und Kunst nicht aus den Mysterien hervorgehen und niemals im Geheimnis die Weisheit liegt. Die wahre Wissenschaft ist vielmehr auf dem offenen Felde des Bewußtseins. ...

81)Nietzsche „Die Geburt der Tragödie"(V(5)20) 1872. Kap.4: Kritische Gesamtausgabe(V(5)1). 3.Abt. Bd.1. 1972. S.37.

Bis zu diesem Punkte ist des Weiteren ausgeführt worden, was ich am Eingange dieser Abhandlung bemerkte: wie das Dionysische und das Apollinische in immer neuen auf einander folgenden Geburten, und sich gegenseitig steigernd das hellenische Wesen beherrscht haben: ...

82)Hegel „Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte" Einleitung. Einteilung: Werke(V(5)53). Bd.12. S.134.

Die Weltgeschichte geht von Osten nach Westen, denn Europa ist schlechthin das Ende der Weltgeschichte, Asien der Anfang. ... Hier geht die äußerliche physische Sonne auf, und im Westen geht sie unter: dafür steigt aber hier die innere Sonne des Selbstbewußtseins auf, die einen höheren Glanz verbreitet. ...

83)Haym, Rudolf: Die Romantische Schule. Ein Beitrag zur Geschichte des deutschen Geistes. Berlin (Rudolph Gaertner) 1870(1.Aufl.). III.Buch. I. Kap. S.289; 4.Aufl. Berlin (Weidmann) 1920. S.341.

Ein Seitentrieb der romantischen Poesie

Vgl. Dilthey: Das Erlebnis und die Dichtung(V(5)69). 1.Aufl. 1905. 8.Aufl. Leipzig (Teubner) 1922. S.396.

Hyperion ist nicht ‚ein Seitentrieb der romantischen Poesie', wie Haym ihn auffaßte; ...

— mich zum Menschen gemacht — zehre mit Geisterglut meinen Leib, daß ich lustig mit dir inniger mich mische und dann ewig die Brautnacht währt.

71)Tateno, Hideö „Die Idee der Wiedergeburt in den ‚Hymnen an die Nacht'": Sophia-Universität „Beiträge zur deutschen Literatur" Nr.17. 1980. S.105-119.

72) Vgl. (V(5)70).

73) Vgl. (V(5)70).

74)Novalis „Hymnen an die Nacht" 5.Hymne: Schriften in 4 Bänden(V(5)68). Bd.1. S.63.

Zur Hochzeit ruft der Tod —
Die Lampen brennen helle —
Die Jungfraun sind zur Stelle —
Um Öl ist keine Not —
Erklänge doch die Ferne
Von deinem Zuge schon,
Und ruften uns die Sterne
Mit Menschenzung' und Ton.

Nach dir, Maria, heben
Schon tausend Herzen sich.
In diesem Schattenleben
Verlangten sie nur dich.
Sie hoffen zu genesen
Mit ahndungsvoller Lust —

j)„SITTLICHKEIT"

75)Novalis „Ofterdingen. Ein Roman"(1799-1801) I.Teil. Die Erwartung. 2. Kap.: Schriften in 4 Bänden(V(5)68). Bd.1. S.109/S.110.

... Zog schon das Geheimnis der Natur und die Entstehung ihrer Körper den ahndenden Geist an: so erhöhte die seltnere Kunst ihrer Bearbeitung, die romantische Ferne, aus der man sie erhielt, und die Heiligkeit ihres Altertums, ... (S.109/S.110) ... , so hat sich auch zwischen den rohen Zeiten der Barbarei und dem kunstreichen, vielwissenden und begüterten Weltalter eine tiefsinnige und romantische Zeit niedergelassen, die unter schlichtem Kleide eine höhere Gestalt verbirgt. Wer wandelt nicht gern im Zwielichte, wenn die Nacht am Lichte und das Licht an der Nacht in höhere Schatten und Farben zerbricht; und also vertiefen wir uns willig in die Jahre, wo Heinrich lebte und jetzt neuen Begebenheiten mit vollem Herzen entgegenging. ...

76) Vgl. (V(5)75).

77)Novalis „Die Christenheit oder Europa"(1799): Schriften in 4 Bänden(V(5)68). Bd.2. S.67-84.

78)Karouzou, Semni (Éphore honoraire du Musée National d'Athènes): Musée National. Guide illustré du Musée. Athènes (EKDOTIKE ATHENON S.A.) 1981. S.57(Farbphotographisches Abbild): Le grand relief éleusinien représentant les deux divinités et le jeune Triptolème(S.56)|S.58(Erklärung).

SALLE 15. Salle du Poséidon ... Relief d'Éleusis. Où, sinon au Télestérion d'Éleusis, aurait-on pu trouver le grand relief représentant deux divinités éleusiniennes? À gauche, vénérable et hiératique, Déméter, les cheveux tombant sur la nuque, tient le sceptre de sa main gauche et donne de l'autre les épis — autrefois dorés — au jeune Triptolème, nu. Debout, il écoute l'ordre qu'elle lui donne de s'envoler dans son char ailé, pour aller faire connaître aux hommes l'agriculture qu'elle leur révèle. À droit, se tient la jeune Corê, Perséphone. Vers 440-430 av. J.-C.

Vgl. Sawayanagi, Daigorô: Die griechische Kunst. Tokyô (Iwanami) 1964. S.188.

sitz, sondern durch die Nachforschung der Wahrheit erweitern sich seine Kräfte, worin allein seine immer wachsende Vollkommenheit bestehet. Der Besitz macht ruhig, träge, stolz. —

Wenn Gott in seiner Rechten alle Wahrheit und in seiner (S.58/S.59) Linken den einzigen immer regen Trieb nach Wahrheit, obschon mit dem Zusatze, mich immer und ewig zu irren, verschlossen hielte und spräche zu mir: „Wähle!" ich fiele ihm mit Demut in seine Linke und sagte: „Vater, gib! die reine Wahrheit ist ja doch nur für dich allein!"

65)Hegel „Eleusis" V.37-40: Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe. Bd.7. 1. S.234; Hegel-Werke(V(5)53). Bd.1. S.231.

Dem Sinne nähert Phantasie das Ewige
vermählt es mit Gestalt — Willkommen, ihr
erhabne Geister, hohe Schatten,
von deren Stirne die Vollendung strahlt! 40

66) Vgl. (V(5)9).

i)„ROMANTISIEREN"

67)Schelling „System des transzendentalen Idealismus"(1800) VI. Deduktion eines allgemeinen Organs der Philosophie oder Hauptsätze der Philosophie der Kunst nach Grundsätzen des transzendentalen Idealismus. §.3. Folgesätze (Verhältnis der Kunst zum ganzen System der Philosophie): Werke. Nach der Originalausgabe. München (Beck/Oldenbourg) 1927(Bd.1-4)/1928(Bd.5-6). Bd.2. S.625. (Originalausgabe. Bd.III. S.625)

Diese allgemein anerkannte und auf keine Weise hinwegzuleugnende Objektivität der intellektuellen Anschauung ist die Kunst selbst. Denn die ästhetische Anschauung eben ist die objektiv gewordene intellektuelle. ... Eine solche Anschauung ist das Organ aller Philosophie. — Aber diese Anschauung, die nicht eine sinnliche, sondern eine intellektuelle ist, die nicht das Objektive oder das Subjektive, sondern das absolut Identische, an sich weder Subjektive noch Objektive, zum Gegenstand hat, ist selbst bloß eine innere, die für sich selbst nicht wieder objektiv werden kann: sie kann objektiv werden nur durch eine zweite Anschauung. Diese zweite Anschauung ist die ästhetische.

68)Novalis „Fragment von 1798": Schriften. 4 Bände. Leipzig (Bibliographisches Institut) 1929. Bd.2. S.335//S.411.

Die Welt muß romantisiert werden. So findet man den ursprünglichen Sinn wieder. Romantisieren ist nichts als eine qualitative Potenzierung. ... Indem ich dem Gemeinen einen hohen Sinn, dem Gewöhnlichen ein geheimnisvolles Ansehn, dem Bekannten die Würde des Unbekannten, dem Endlichen einen unendlichen Schein gebe, so romantisiere ich es. ... (S.335//S. 411) ... Die Poesie ist das echt absolut Reelle. Dies ist der Kern meiner Philosophie. Je poetischer, je wahrer. ...

69)Dilthey, Wilhelm „Das Erlebnis und die Dichtung"(1905) 8.Aufl. Leipzig (Teubner) 1922 / Ôtomo, Susumu „Hölderlin=Novalis-Studien": Forschungsberichte der Universität Sensyû. Geisteswissenschaften. Nr.28/Nr.29/Nr.31/ Nr.32. 1982/1982/1983/1984. S.45-65/S.117-152/S.37-66/S.25-67.

70)Novalis „Hymnen an die Nacht"(August 1800) 1.Hymne: Schriften in 4 Bänden(V(5)68). Bd.1. S.55/S.56.

Abwärts wend ich mich zu der heiligen, unaussprechlichen, geheimnisvollen Nacht. Fernab liegt die Welt — ... (S.55/S.56) ... Himmlischer, als jene blitzenden Sterne, dünken uns die unendlichen Augen, die die Nacht in uns geöffnet. ... Preis der Weltkönigin, der hohen Verkündigerin heiliger Welten, der Pflegerin seliger Liebe — sie sendet mir dich — zarte Geliebte — liebliche Sonne der Nacht, — nun wach ich — denn ich bin dein und mein — du hast die Nacht mir zum Leben verkündet

... Mit dem freyen, selbstbewußten Wesen tritt zugleich eine ganze Welt — aus dem Nichts hervor — die einzig wahre und gedenkbare Schöpfung aus Nichts — ... (S.297/S.298) ... Zulezt die Idee, die alle vereinigt, die Idee der Schönheit, das Wort in höherem platonischem Sinne genommen. Ich bin nun überzeugt, daß der höchste Akt der Vernunft, der, indem sie alle Ideen umfast, ein ästhetischer Akt ist, und daß Wahrheit und Güte, nur in der Schönheit verschwistert sind. Der Philosoph muß eben so viel ästhetische Kraft besizen, als der Dichter. Der Mensch ohne ästhetischen Sinn sind unsre Buchstaben Philosophen. Die Philosophie des Geistes ist eine ästhetische Philosophie. Man kan in nichts geistreich seyn, selbst über Geschichte kan man nicht geistreich raisonniren — ohne ästhetischen Sinn. ... Die Poësie bekömmt dadurch eine höhere Würde, sie wird am Ende wieder, was sie am Anfang war — Lehrerin der Menschheit; denn es gibt keine Philosophie, keine Geschichte mehr, die Dichtkunst allein wird alle übrigen Wissenschaften und Künste überleben. ... (S.298/S.299) ... — Ein höherer Geist vom Himmel gesandt, muß diese neue Religion unter uns stiften, sie wird das lezte, gröste Werk der Menschheit seyn.

Vgl. Schiller „Was heißt und zu welchem Ende studiert man Universalegeschichte? Eine akademische Antrittsrede"(26. und 27. Mai 1789: Sonderdruck im November 1789 in Wielands „Teutschem Merkur"): Weimarer Nationalausgabe. Bd.17. 1970. S.373.

Nicht lange kann sich der philosophische Geist bey dem Stoffe der Weltgeschichte verweilen, so wird ein neuer Trieb in ihm geschäftig werden, der nach Uebereinstimmung strebt — der ihn unwiderstehlich reizt, alles um sich herum seiner eigenen vernünftigen Natur zu assimiliren, und jede ihm vorkommende Erscheinung zu der höchsten Wirkung die er erkannt, zum Gedanken zu erheben. ...

Vgl. Schiller „Über Bürgers Gedichte"(1791): Weimarer Nationalausgabe. Bd. 22. 1958. S.245//S.253.

Bei der Vereinzelung und getrennten Wirksamkeit unsrer Geisteskräfte, die der erweiterte Kreis des Wissens und die Absonderung der Berufsgeschäfte notwendig macht, ist es die Dichtkunst beinahe allein, welche die getrennten Kräfte der Seele wieder in Vereinigung bringt, welche Kopf und Herz, Scharfsinn und Witz, Vernunft und Einbildungskraft in harmonischem Bunde beschäftigt, welche gleichsam den ganzen Menschen in uns wieder herstellt. ... (S.245//S.253) ... Eine der ersten Erfordernisse des Dichters ist Idealisierung, Veredlung, ohne welche er aufhört, seinen Namen zu verdienen. Ihm kommt es zu, das Vortreffliche seines Gegenstandes (mag dieser nun Gestalt, Empfindung oder Handlung sein, in ihm oder außer ihm wohnen) von gröbern, wenigstens fremdartigen Beimischungen zu befreien, die in mehrern Gegenständen zerstreuten Strahlen von Vollkommenheit in einem einzigen zu sammeln, einzelne, das Ebenmaß störende Züge der Harmonie des Ganzen zu unterwerfen, das Individuelle und Lokale zum Allgemeinen zu erheben. Alle Ideale, die er auf diese Art im einzelnen bildet, sind gleichsam nur Ausflüsse eines innern Ideals von Vollkommenheit, das in der Seele des Dichters wohnt. Zu je größerer Reinheit und Fülle er dieses innere allgemeine Ideal ausgebildet hat, desto mehr werden auch jene einzelnen sich der höchsten Vollkommenheit nähern. Diese Idealisierkunst vermissen wir bei Hn. Bürger.

64) Vgl. (V(5)60).

Vgl. Lessing „Eine Duplik"(1778): Werke in 25 Teilen(V(5)39). Teil 23. S. 58-59.

Nicht die Wahrheit, in deren Besitz irgendein Mensch ist oder zu sein vermeinet, sondern die aufrichtige Mühe, die er angewandt hat, hinter die Wahrheit zu kommen, macht den Wert des Menschen. Denn nicht durch den Be-

V(5)57-63

l'Océan. C'est toi qui m'as montré la voie. C'est avec toi que j'ai commencé. Les jours où je ne te connaissais pas encore ne valent pas d'être dits. Ô Diotima, Diotima, fille du ciel!

58)Hölderlin „Hyperion" Bd.1. Buch 1. Brief 4: Stuttgarter Ausgabe. Bd.3. S.14.

Wie unvermögend ist doch der gutwilligste Fleiß der Menschen gegen die Allmacht der ungetheilten Begeisterung.

Vgl. Hölderlin „Hypérion" Volume premier. Premier Livre. Lettre 4: OEuvres(V(5)2). S.142.

La toute-puissance d'une ferveur sans partage annule l'application la mieux intentionnée.

59)Hegel „Eleusis" V.67-69: Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe. Bd.7. 1. S.235; Hegel-Werke(V(5)53). Bd.1. S.232.

Dem Sohn der Weihe war der hohen Lehren Fülle
des unaussprechlichen Gefühles Tiefe viel zu heilig, 68
als daß er trokne Zeichen ihrer würdigte.

60)Hegel „Eleusis" V.56-61: Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe. Bd.7. 1. S.234 (V.56-58)/S.235 (V.59-61);Hegel-Werke(V(5)53). Bd.1. S.231(V.56-59)/S.232(V.60ff).

die Weisheit deiner Priester schweigt, kein Ton der heil'gen Weihen
hat sich zu uns gerettet — und vergebens sucht
des Forschers Neugier — mehr, als Liebe S.234
zur Weisheit (sie besizen die Sucher, und S.235
verachten dich) — um sie zu meistern graben sie nach Worten,
In die dein hoher Sinn gepräget wär!

61) Vgl. (V(5)60).

62)Hölderlin „Hyperion" Bd.1. Buch 2. Brief 30: Stuttgarter Ausgabe. Bd.3. S.81/S.83. Über die Philosophie.

Die Dichtung, sagt' ich, meiner Sache gewiß, ist der Anfang und das Ende dieser Wissenschaft. Wie Minerva aus Jupiters Haupt, entspringt sie aus der Dichtung eines unendlichen göttlichen Seyns. ... , der nie erfuhr, wie nur in Stunden der Begeisterung alles innigst übereinstimmt, der Mensch wird nicht einmal ein philosophischer Zweifler werden, ... (S.81 /S.83) ... Verstand ist ohne Geistesschönheit, wie ein dienstbarer Geselle, der den Zaun aus grobem Holze zimmert, wie ihm vorgezeichnet ist, und die gezimmerten Pfähle an einander nagelt, für den Garten, den der Meister bauen will. ... Aus blosem Verstande kömmt keine Philosophie, denn Philosophie ist mehr, denn nur die beschränkte Erkenntniß des Vorhandnen. ...

Vgl. Hölderlin „Hypérion" Volume premier. Second Livre. Lettre 30: OEuvres(V(5)2). S.202/S.203/S.204/S.205.

— Quel rapport, demanda-t-il, entre la philosophie, l'élévation austère de cette science, et la poésie?

— La poésie, dis-je, sûr de mon fait, est le commencement et la fin de cette science. Comme Minerve de la tête de Jupiter, cette science est sortie de la poésie d'un Être divin infini. ... (S.202/S.203) ... —, qui n'a jamais éprouvé que seules les heures d'enthousiasme révèlent le profond concert de toutes choses créées, cet homme ne donnera même pas un douteur; ... (S.203/S.204) ... Sans la beauté de l'esprit, l'intellect est pareil au serf qui taille dans un bois grossier, comme on le lui a prescrit, les pieux d'un enclos et qui les cloue ensemble, pour le jardin de son maître. ... (S.204/S.205) ... L'intellect pur ne produit nulle philosophie, car la philosophie ne se réduit pas à la reconnaissance bornée de ce qui est. ...

63) Vgl. (V(5)62).

Vgl. Hölderlin/Hegel/Schelling „Das älteste Systemprogramm des deutschen Idealismus"(1796): Stuttgarter Ausgabe. Bd.4. S.297-299; Hegel-Werke(V(5) 53). Bd.1. S.234-236.

Pluie du ciel, ô ferveur! Tu nous ramèneras le printemps des nations! L'État ne peut disposer de toi. Mais qu'il ne te gêne point, et tu viendras, avec tes voluptés toutes-puissantes, tu nous envelopperas dans un nuage d'or et nous élèveras au-dessus de la condition mortelle; alors, pleins de stupeur, nous douterons d'être ces mêmes indigents qui interrogeaient les astres pour (S.158/S.159) savoir s'ils verraient encore un printemps... Quand cela sera, me demandes-tu? Quand la préférée du Temps, sa plus jeune, sa plus belle fille, la nouvelle Église, surgira de ces formes désuètes et souillées, quand le réveil du sens du divin rendra à l'homme son dieu et au coeur sa jeunesse, quand... je ne puis l'annoncer, car c'est à peine si je la pressens, mais je ne doute pas qu'elle vienne. La mort est messagère de vie: si nous dormons maintenant dans notre hôpital, c'est que bientôt nous nous réveillerons guéris. Alors seulement nous serons, alors nous aurons trouvé l'élément où l'esprit respire!

55)Hegel „Eleusis" V.43-47: Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe. Bd.7. 1. S.234; Hegel-Werke(V(5)53). Bd.1. S.231.

Ha! sprängen izt die Pforten deines Heiligthumes selbst,
O Ceres, die du in Eleusis throntest! Von
Begeisterung trunken fühlt' ich izt, 45
Die Schauer deiner Nähe,
verstünde deiner Offenbahrungen,

56)Hegel „Eleusis" V.26-36: Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe. Bd.7. 1. S.234; Hegel-Werke(V(5)53). Bd.1. S.230f.

Mein Aug erhebt sich zu des ew'gen Himmels Wölbung,
zu dir, o glänzendes Gestirn der Nacht!
und aller Wünsche, aller Hofnungen
Vergessen strömt aus deiner Ewigkeit herab;
der Sinn verliert sich in dem Anschaun, 30
was mein ich nannte schwindet,
ich gebe mich dem unermeslichen dahin,
ich bin in ihm bin alles, bin nur es.
Dem wiederkehrenden Gedanken fremdet,
ihm graut vor dem unendlichen, und staunend fast 35
er dieses Anschauns Tiefe nicht.

57)Hölderlin „Hyperion" Bd.1. Buch 2. Brief 14: Stuttgarter Ausgabe. Bd.3. S.52-53.

O ihr, die ihr das Höchste und Beste sucht, in der Tiefe des Wissens, im Getümmel des Handelns, im Dunkel der Vergangenheit, im Labyrinthe der Zukunft, in den Gräbern oder über den Sternen! wißt (S.52/S.53) ihr seinen Nahmen? den Nahmen deß, das Eins ist und Alles? Sein Nahme ist Schönheit. Wußtet ihr, was ihr wolltet? Noch weiß ich es nicht, doch ahn'ich es, der neuen Gottheit neues Reich, und eil' ihm zu und ergreiffe die andern und führe sie mit mir, wie der Strom die Ströme in den Ocean. Und du, du hast mir den Weg gewiesen! Mit dir begann ich. Sie sind der Worte nicht werth, die Tage, da ich noch dich nicht kannte — O Diotima, Diotima, himmlisches Wesen!

Vgl. Hölderlin „Hypérion" Volume premier. Second Livre. Lettre 14: OEuvres(V(5)2). S.177.

Ô vous qui recherchez le meilleur et le plus haut, dans la profondeur du savoir, dans le tumulte de l'action, dans l'obscurité du passé ou le labyrinthe de l'avenir, dans les tombeaux ou au-dessus des astres, savez-vous son nom? Le nom de ce qui constitue l'Un et le Tout? Son nom est Beauté. Saviez-vous ce que vous vouliez? Je ne le connais pas encore, mais je le pressens, le règne de la nouvelle divinité, je cours à lui, entraînant les autres avec moi, comme le fleuve entraîne ses frères à

50)Biblia Germanica 1545 (V(5)36). 2.Teil. S.249: Euangelium Mattheus. VII. 7.

Suchet / so werdet jr finden / Klopffet an so wird euch auffgethan. ...

51)Hölderlin „Brod und Wein" V.152 / „Le Pain et le vin" vers 152: V(5)28.

h)„ANSCHAUN" UND „SUCHEN"

52)Hölderlin „Hyperions Jugend"(1795) 1.Teil. Kap.3: Stuttgarter Ausgabe. Bd.3. S.209.

Bewahre dich, junge Seele! Du gehörst einer andern Welt. Befasse dich nicht zu viel mit dieser, bis deine Zeit kommt, und du unter ihr wirkst. Nähre dein Herz mit der Geschichte besserer Tage, suche nichts unter den jezigen! ...

53)Hegel „Eleusis. An Hölderlin"(1796) V.78-80: Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe. Bd.7. 1. S.235. Vgl. Hegels Werke in 20 Bänden. Auf der Grundlage der „Werke"(1832-45). Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1969-71 (Register 1979) Bd.1. S.232.

Was der geweihte sich so selbst verbot, verbot ein weises
Gesez den ärmern Geistern, das nicht kund zu thun,
was er in heil'ger Nacht gesehn, gehört, gefühlt —

Vgl. Homerische Hymnen. Griechisch und deutsch hrsg. v. Weiher, Anton. Tusculum-Bücher. München (Heimeran) 3.Aufl. 1970. S.6-33: An Demeter. V.470-484(S.32:Griechisch/S.33:Deutsch).

Also sprach sie; die schön bekränzte Demeter gehorchte, 470
Ließ in den großen Schollen der Äcker sogleich wieder Früchte
Wachsen, daß weithin die Erde strotzte von Blättern und Blüten,
Ging zu den Königen dann, den Wahrern des Rechtes, und zeigte
Erst dem Triptolemos, Diokles dann, dem Meister der Pferde,
Keleos auch, dem Führer der Männer, der Kraft des Eumolpos, 475
Allen den Opferdienst und beschrieb die erhabenen Weihen,
Erst dem Triptolemos, dann Polyxeinos, Diokles wieder.
Keiner darf je sie verletzen, erforschen, verkünden; denn große
Ehrfurcht vor den Göttern läßt Menschenrede verstummen.
Selig der Erde bewohnende Mensch, der solches gesehen! 480
Doch wer die Opfer nicht darbringt, oder sie meidet, wird niemals
Teilhaft solches Glücks; er vergeht in modrigem Düster.
Aber als nun alles die himmlische Göttin gestiftet,
Brachen sie auf zum Olympos, zum Kreise der anderen Götter.

54)Hölderlin „Hyperion" Bd.1. 1797. Buch 1. Brief 7: Stuttgarter Ausgabe. Bd.3. S.32.

O Regen vom Himmel! o Begeisterung! Du wirst den Frühling der Völker uns wiederbringen. Dich kann der Staat nicht hergebieten. Aber er störe dich nicht, so wirst du kommen, kommen wirst du, mit deinen allmächtigen Wonnen, in goldne Wolken wirst du uns hüllen und empor uns tragen über die Sterblichkeit, und wir werden staunen und fragen, ob wir es noch seyen, wir, die Dürftigen, die wir die Sterne fragten, ob dort uns ein Frühling blühe — frägst du mich, wann diß seyn wird? Dann, wann die Lieblingin der Zeit, die jüngste, schönste Tochter der Zeit, die neue Kirche, hervorgehn wird aus diesen beflekten veralteten Formen, wann das erwachte Gefühl des Göttlichen dem Menschen seine Gottheit, und seiner Brust die schöne Jugend wiederbringen wird, wann — ich kann sie nicht verkünden, denn ich ahne sie kaum, aber sie kömmt gewiß, gewiß. Der Tod ist ein Bote des Lebens, und daß wir jezt schlafen in unsern Krankenhäusern, diß zeugt vom nahen gesunden Erwachen. Dann, dann erst sind wir, dann ist das Element der Geister gefunden!

Vgl. Hölderlin „Hypérion"(Traduction par Jaccottet, Philippe) Volume premier. Premier Livre. Lettre 7: OEuvres(V(5)2). S.158-159.

V(5)43-49

Froh des neuen ungewohnten Schwebens
Fließt er aufwärts, und des Erdenlebens 175 / 145
Schweres Traumbild sinkt und sinkt und sinkt.

44) Vgl. (V(5)2).

f)„HEILIGE NACHT"

45)Hölderlin „Emilie vor ihrem Brauttag"(1799) V.27-31: Stuttgarter Ausgabe. Bd.1. S.278.

Und hab' ich ihn den theuern Vater nicht,
Den Heiligjugendlichen, Vielerfahrnen,
Der, wie ein stiller Gott auf dunkler Wolke,
Verborgenwirkend über seiner Welt 30
Mit freiem Auge ruht, ...

46)Hölderlin „Brod und Wein" Str.6. V.105-108: Stuttgarter Ausgabe. Bd.2. S.93.

Warum zeichnet, wie sonst, die Stirne des Mannes ein Gott nicht, 105
Drükt den Stempel, wie sonst, nicht dem Getroffenen auf?
Oder er kam auch selbst und nahm des Menschen Gestalt an
Und vollendet' und schloß tröstend das himmlische Fest.

Vgl. Hölderlin „Le Pain et le vin"(V(5)2) vers 105-108: OEuvres. S.812.

Et pourquoi donc un dieu ne grave-t-il plus le front de l'homme 105
Comme jadis, et scellant de son sceau celui qu'il a saisi?
Lui-même il descendait parfois et prenant forme humaine
À la divine fête il donnait fin, consolateur.

47)Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin — „Seeliges Griechenland" (Forschungsberichte der Universität Kôchi für die Jahren 1984/1985/1986. Vol.33/Vol.34/Vol.35. Geisteswissenschaften. S.13-72/S.1-72/S.1-66). [II] Das klassische Griechentum und das abendländische Christentum. (7) Die Antike als Idee (Vol.34. S.7-20) / [III] „Gott der Mythe". (10) „Die tiefste Innigkeit" (Vol.35. S.2-14).

48)Hölderlin „Brod und Wein" Str.8. V.129-132: Stuttgarter Ausgabe. Bd.2. S.94.

Als erschienen zu lezt ein stiller Genius, himmlisch
Tröstend, welcher des Tags Ende verkündet' und schwand, 130
Ließ zum Zeichen, daß einst er da gewesen und wieder
Käme, der himmlische Chor einige Gaaben zurük,

Vgl. Hölderlin „Le Pain et le vin"(V(5)2) vers 129-132: OEuvres. S.813.

Quand, dernière Présence, un paisible Génie aux divines paroles
Consolatrices, eut annoncé la fin du Jour et disparu, 130
Comme un signe de sa venue ici-bas jadis, un gage
De son retour, le choeur des dieux nous laissa quelques dons

g)„SUCHEN" UND „PRÜFEN"

49)Hölderlin „Hyperion" Thalia-Fragment 1794: Stuttgater Ausgabe. Bd.3. S. 184.

Wir sind nichts; was wir suchen, ist alles. ... Noch ahnd' ich, ohne zu finden. Ich frage die Sterne, und sie verstummen, ich frage den Tag, und die Nacht; aber sie antworten nicht. ... Es muß heraus, das große Geheimniß, das mir das Leben giebt oder den Tod.

Vgl. Hölderlin „Hypérion" Fragment Thalia: OEuvres(V(5)2). S.132-133.

Nous ne sommes rien; c'est ce que nous cherchons qui est tout. (S.132/S. 133) ... J'EN suis encore à pressentir, mais ne trouve point. J'interroge les astres, ils se taisent; j'interroge le jour, la nuit, ils ne répondent point. ... Car le mystère considérable dont j'attends la vie, ou la mort, doit être un jour révélé.

des Meers allezeit ruhig bleibet, die Oberfläche mag (S.30/S.31) noch so wüthen, eben so zeiget der Ausdruk in den Figuren der Griechen bei allen Leidenschaften eine große und gesezte Seele. ... §.178. Der Pinsel, den der Künstler führet, soll in Verstand getunkt sein, wie jemand von dem Schreibegiffel des Aristoteles gesaget hat. ...

39)Lessing „Laokoon" Kap.XXVI: Werke in 25 Teilen. Bongs Goldene Klassiker Bibliothek. 1925/1929/1935. Hildesheim (Olms) Faksimile-Nachdruck 1970. Teil 4. S.409.

... Wincklemanns „Geschichte der Kunst des Altertums"(1764) ist erschienen. Ich wage keinen Schritt weiter, ohne dieses Werk gelesen zu haben. ... und wo so ein Mann die Fackel der Geschichte vorträgt, kann die Spekulation kühnlich nachtreten. ...

40)Schiller „Das Reich der Schatten"(1795) Str.1. V.1-3(„Horen" hrsg. v. Schiller. 9.Stück. 1795. September. S.1); Werke. Weimarer Nationalausgabe (Hermann Böhlaus Nachfolger) Bd.1. 1943. S.247: „Das Reich der Formen"(Gedichte. Erster Teil 1800); Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil 1. 1983. S.118: „Das Ideal und das Leben" 1.Str. V.1-3(Gedichte. I.Teil. 2.Aufl. 1804 / Ausgabe letzter Hand. 1805); Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil I. S.164/S.396(„Das Ideal und das Leben" 1.Str. V.1-3).

Ewig klar und spiegelrein und eben
Fließt das zephyrleichte Leben
Im Olymp den Seligen dahin. („Das Reich der Schatten" V.1-3)
Ewigklar und spiegelrein und eben
Fließt das zephyrleichte Leben
Im Olymp den Seligen dahin. („Das Ideal und das Leben" V.1-3)

41)Hölderlin „Hyperion" Bd.2. Buch 2. Brief 28 (V(5)37). Bd.3. S.143: „Hyperions Schiksaaalalied" Str.3. V.16-24 (V(5)37). Bd.1. S.265.

Doch uns ist gegeben,
Auf keiner Stätte zu ruhn,
Es schwinden, es fallen
Die leidenden Menschen
Blindings von einer 20
Stunde zur andern,
Wie Wasser von Klippe
Zu Klippe geworfen,
Jahr lang ins Ungewisse hinab.

Vgl. Hölderlin „Hypérion" Volume second. Second Livre. Lettre 28 (V(5) 37). S.258.

Mais à nous il échoit
De ne pouvoir reposer nulle part.
Les hommes de douleur
Chancellent, tombent
Aveuglément d'une heure 20
À une autre heure,
Comme l'eau de rocher
En rocher rejetée
Par les années dans le gouffre incertain.

42)Schiller „Das Reich der Schatten"(V(5)40) Str.11. V.107-110; Weimarer Nationalausgabe. Bd.1. S.250: „Das Ideal und das Leben"(V(5)40) Str.8. V. 77-80; Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil 1. S.398.

Nur dem Ernst, den keine Mühe bleichet,
Rauscht der Wahrheit tief versteckter Born,
Nur des Meisels schwerem Schlag erweichet
Sich des Marmors sprödes Korn. 110 / 80

43)Schiller „Das Reich der Schatten"(V(5)40) Str.18. V.174-176; Weimarer Nationalausgabe. Bd.1. S.251: „Das Ideal und das Leben"(V(5)40) Str.15. V.144-146; Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil 1. S.400.

34)Pope, Alexander „An Essay on Man"(„Ein Versuch über den Menschen"(V(5)32) 1733-34) Epistle I. 1733. V.201-204: An Essay on Man. Epistles I-IV. London (Macmillan's English Classics) 1895(1.Aufl.) 1919. S.9(Sphärenmusik).

If nature thunder'd in his op'ning ears,
And stunn'd him with the music of the spheres, 202
How would he wish that Heav'n had left him still
The whisp'ring zephyr, and the purling rill?

35)Kant „Kritik der praktischen Vernunft"(1788) Beschluß: Werke. Akademie-Textausgabe(V(5)23). Bd.5. S.161.

Zwei Dinge erfüllen das Gemüth mit immer neuer und zunehmender Bewunderung und Ehrfurcht, je öfter und anhaltender sich das Nachdenken damit beschäftigt: der bestirnte Himmel über mir und das moralische Gesetz in mir. ...

36)Biblia Germanica 1545 (Deutsch nach Luther). Faksimile-Ausgabe. Stuttgart (Deutsche Bibelgesellschaft) 1967/83. I.Teil. S.291: Der Psalter. VIII. 3-4.

Denn ich werde sehen die Himel deiner Finger werck / Den Monden und die Sterne die du bereitest.
WAs ist der Mensch / das du sein gedenckest / Vnd des Menschen kind / Das du dich sein annimpst:

e)„DAS IDEAL UND DAS LEBEN"

37)Hölderlin „Hyperion" Bd.2. 1799. Buch 2. Brief 28 (Stuttgarter Ausgabe. Bd.3. S.143): „Hyperions Schiksaalslied" Str.2. V.7-15 (Stuttgarter Ausgabe. Bd.1. S.265).

Schiksaallos, wie der schlafende
Säugling, athmen die Himmlischen;
Keusch bewahrt
In bescheidener Knospe, 10
Blühet ewig
Ihnen der Geist,
Und die seeligen Augen
Bliken in stiller
Ewiger Klarheit.

Vgl. Hölderlin „Hypérion" Volume second. 1799. Second Livre. Lettre 28: OEuvres(V(5)2). S.258 (Traduction par Jaccottet, Philippe).

Les habitants du Ciel vivent purs de Destin
Comme le nourrisson qui dort;
Gardé avec pudeur
En modeste bouton, 10
L'esprit éternellement
Fleurit en eux.
Et les yeux bienheureux
Considèrent la calme
Éternelle clarté.

38)Winckelmann „Gedancken über die Nachahmung der Griechischen Wercke in der Mahlerey und Bildhauer-Kunst" §.1/§.5/§.79/§.178: Werke in 12 Bänden. 1825/28. Faksimile-Nachdruck. Osnabrück (Otto Zeller) 1965. Bd.1. S.7/S.8 /S.30f./S.56.

§.1. Der gute Geschmak, welcher sich mehr und mehr durch die Welt ausbreitet, hat sich angefangen zuerst unter dem griechischen Himmel zu bilden. ... §.5. Die reinsten Quellen der Kunst sind geöfnet: glüklich ist, wer sie findet und schmeket. Diese Quellen suchen, heißt nach Athen reisen; ... §.79. Das allgemeine vorzügliche Kenzeichen der griechischen Meisterstüke ist endlich eine edle Einfalt, und eine stille Größe, sowohl in der Stellung als im Ausdruke. So wie die Tiefe

Von himmlischen und irdischen, von Engeln, Menschen bis zum Vieh,
Vom Seraphim bis zum Gewürm! O Weite, die das Auge nie
Erreichen und betrachten kann,
Von dem Unendlichen zu dir, von dir zum Nichts!
(„Ein Versuch über den Menschen" 1733-34. I.Epistel. V.237-41) Pope.

... Wer ist so kühn, eine Beantwortung der Frage zu wagen: ob die Sünde ihre Herrschaft auch in den andern Kugeln des Weltbaues ausübe, oder ob die Tugend allein ihr Regiment daselbst aufgeschlagen?

Die Sterne sind vielleicht ein Sitz verklärter Geister,
Wie hier das Laster herrscht, ist dort die Tugend Meister.
(„Über den Ursprung des Übels" III.Buch. V.197-198) Haller.

Vgl. Kant „Histoire générale de la nature et théorie du ciel" IIIe partie. Appendice. Des habitants des astres: OEuvres(V(5)23). Tome I. S.104-105.

Les perfections de Dieu se sont manifestées clairement aux degrés qui sont les nôtres, et elles ne sont pas moins magnifiques dans les classes inférieures que dans les classes plus sublimes.

Quelle chaîne, qui commence avec Dieu, que de natures,
Des célestes et terrestres, des anges, des hommes jusqu'aux bêtes,
Des Séraphins jusqu'au ver! Ô ampleur que l'oeil jamais
Ne peut atteindre et contempler
De l'infini à toi, de toi au néant.
(„Un Essai sur l'Homme" 1ère Epître. vers 237-241) POPE.

... Qui serait assez hardi pour se risquer à répondre à la question de savoir si le péché exerce aussi sa domination dans les autres globes de l'univers, ou bien si la seule vertu règle leur gouvernement? (S.104/S.105)

Les étoiles sont peut-être le siège d'esprits éclairés,
De même qu'ici le vice règne, là-bas, la vertu est maîtresse.
(„Sur l'origine du mal" Livre III. vers 197-198) HALLER.

33)Störig, Hans Joachim: Kleine Weltgeschichte der Wissenschaft. 2 Bände. Neuausgabe nach der 4.Aufl. 1970 (Stuttgart. Kohlhammer). Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1982. Bd.1. 9.Kap. Universale Mathematik. Die Wissenschaften im 17. Jahrhundert. III. Physik und Chemie. 1. Universelle Gravitation. S.328-330(Zur Würdigung und Kritik).

Die ganze Welt eine einzige, mechanischen Gesetzen gehorchende Maschine! Die Physik der folgenden zwei Jahrhunderte baute weiter auf der von Newton gelegten Grundlage. ... Wie sehr der Erfolg der Newtonschen Methode durch eine Beschränkung, (S.328/S.329) durch den Verzicht auf die Frage nach dem Wesen ermöglicht wurde, erkennt man leicht, wenn man seine zu Beginn des Werkes gegebenen Ausgangsdefinitionen ansieht. ... Was Newtons Satz wirklich enthält, ist nicht mehr als die Annahme: Zu jedem Körper gehört eine bestimmte Größe, die Masse genannt werden soll. Ähnlich ist es mit anderen Voraussetzungen. Es sind Ausgangsannahmen, Axiome, von denen es schein und jedenfalls Newton schien, daß sie keines Beweises bedürfen. ... So erkannte auch die Physik lange nach Newton, daß seine Axiome sich nicht von selbst verstehen. Die gleichen Schwierigkeiten ergeben sich auch für die das Ganze tragenden Grundbegriffe Raum, Zeit, Ort und Bewegung. Newton unterscheidet absolute und relative Zeit. „Die absolute, wahre und mathematische Zeit ... ." Der gleiche Unterschied wird für den Raum gemacht: „Der absolute Raum ... " ... Endlich auch für die Bewegung: „Die absolute Bewegung ... " ... (S.329/S.330) ... Die Frage ist nur: Wo sollen wir den »absoluten« Raum finden, wenn die Erde sich um die Sonne bewegt, die Sonne sich im Milchstraßensystem bewegt und auch die Milchstraße sich im All mit Riesengeschwindigkeit bewegt? Dies letztere wußte Newton noch nicht. Er nahm an, irgendwo in den äußeren Fernen des Weltraums befänden sich tatsächlich riesige unbewegliche Massen, an deren absoluter Ruhe alle andere Bewegung gemessen werden könne. ...

Wein". ‚Heilige Nacht'. Dritter Teil. „Abgeschiedenheit" und „Brunnen" (Forschungsberichte der Universität Kôchi. Vol.36. 1987. Geisteswissenschaften. S.15-42). S.38(V(1)13).

... lûteriu abegescheidenheit ...

(Eckhart „Von abegescheidenheit": Die deutsche Werke. Stuttgart. Kohlhammer. Bd.5. Tractate. 1963. S.401/S.539)

Und wenn ich alle Schriften durchgründe, soweit meine Vernunft es zu leisten und soweit sie zu erkennen vermag, so finde ich nichts anderes, als daß lautere Abgeschiedenheit alles übertreffe, denn alle Tugenden haben irgendein Absehen auf die Kreatur, während Abgeschiedenheit losgelöst von allen Kreaturen ist.

d)„STERNEN"

27)Haller, Albrecht „Über den Ursprung des Übels" („Versuch Schweizerischer Gedichte" 2.Aufl. 1734) III.Buch. V.193-202: Die Alpen und andere Gedichte. Aufgrund der von L. Hirzel herausgegebenen Ausgabe der „Gedichte"(1882). Stuttgart (Reclam-Universal-Bibliothek) 1965. S.73.

Vielleicht ersetzt das Glück vollkommener Erwählten
Den minder tiefen Grad der Schmerzen der Gequälten;
Vielleicht ist unsre Welt, die wie ein Körnlein Sand 195
Im Meer der Himmel schwimmt, des Übels Vaterland!
Die Sterne sind vielleicht ein Sitz verklärter Geister,
Wie hier das Laster herrscht, ist dort die Tugend Meister,
Und dieses Punkt der Welt von mindrer Trefflichkeit
Dient in dem großen All zu der Vollkommenheit; 200
Und wir, die wir die Welt im kleinsten Teile kennen,
Urteilen auf ein Stück, das wir vom Abhang trennen.

28)Hölderlin „Brod und Wein" Str.9. V.149-154: Stuttgarter Ausgabe. Bd.2. S.95.

Was der Alten Gesang von Kindern Gottes geweissagt,
Siehe! wir sind es, wir; Frucht von Hesperien ists! 150
Wunderbar und genau ists als an Menschen erfüllet,
Glaube, wer es geprüft! aber so vieles geschieht,
Keines wirket, denn wir sind herzlos, Schatten, bis unser
Vater Aether erkannt jeden und allen gehört.

Vgl. Hölderlin „Le Pain et le vin"(V(5)2). vers 149-154: OEuvres. S.814.

Ce qu'ont prédit des enfants de Dieu les chants antiques,
Vois! nous le sommes, nous! Ce sont là les fruits de l'Hespérie! 150
Ô miracle! en des hommes s'est accompli le dire avec rigueur:
Crois-en qui l'éprouva! Mais rien, quoi qu'il advienne, rien n'a force
D'agir, car notre coeur est mort, nous vivrons tels des ombres jusqu'au jour

29) Vgl. (V(5)10).

30) Vgl. (V(5)10).

31)Schmidt: Hölderlins Elegie „Brod und Wein"(V(5)4). S.40.

Die personifizierenden Benennungen der ersten Strophe sind dagegen stimmig, weil sie ganz harmonieren mit dem inneren Wesen der Nacht, mit der Empfindung, die uns aus dem Nachterlebnis zuströmt. Gestaltschöpfung und Bedeutung stimmen vollkommen überein, und so entsteht keine Naturallegorie, sondern ein echter Naturmythos.

32)Kant „Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels"(1755) 3.Teil. Von den Bewohnern der Gestirne: Werke. Akademie-Textausgabe(V(5)23). Bd.1. S.365.

Die Vollkommenheiten Gottes haben sich in unsern Stufen deutlich offenbart und sind nicht weniger herrlich in den niedrigsten Classen, als in den erhabnern.

Welch eine Kette, die von Gott den Anfang nimmt, was für Naturen

c)„MONDNACHT"

22) Vgl. (V(5)2).

23)Kant „Kritik der reinen Vernunft" 1.Aufl. 1781. S.642f. / 2.Aufl. 1787. S.670f.: Werke. Unveränderter photomechanischer Abdruck von „Kants gesammelte Schriften"(Preußische Akademie der Wissenschaften. Bd.3. Berlin. 1904/11) Berlin (Gruyter) 1968. Bd.3. S.426f.

Der Ausgang aller dialektischen Versuche der reinen Vernunft bestätigt nicht allein, was wir schon in der transscendentalen Analytik bewiesen, nämlich daß alle unsere Schlüsse, die uns über das Feld möglicher Erfahrung hinausführen wollen, trüglich und grundlos sind; sondern er lehrt uns zugleich dieses Besondere: daß die menschliche Vernunft dabei einen natürlichen Hang habe, diese Grenze zu überschreiten, daß transscendentale Ideen ihr eben so natürlich seien, als dem Verstande die Kategorien, obgleich mit dem Unterschiede, daß, so wie die letztern zur Wahrheit. d. i. der Übereinstimmung unserer Begriffe mit dem Objecte, führen, (Bd.3. S.426/S.427) die erstern einen bloßen, aber unwiderstehlichen Schein bewirken, dessen Täuschung man kaum durch die schärfste Kritik abhalten kann. ... (1.Aufl. S.642/S.643: 2.Aufl. S.670/S.671) ... Denn nicht die Idee an sich selbst, sondern bloß ihr Gebrauch kann entweder in Ansehung der gesammten möglichen Erfahrung überfliegend (transscendent), oder einheimisch (immanent) sein, ...

Vgl. Kant „Critique de la raison pure": Oeuvres philosophiques. Bibliothèque de la Pléiade. Paris (Gallimard) Tome I. 1980. S.1246f.

L'issue de toutes les tentatives dialectiques de la raison pure ne confirme pas seulement ce que nous avons déjà prouvé dans l'«Analytique trans- (S.1246/S.1247) cendentale», à savoir que tous ceux de nos raisonnements qui veulent nous conduire hors du champ de l'expérience possible sont fallacieux et sans fondement; mais elle nous enseigne aussi cette particularité, que la raison humaine a un penchant naturel à dépasser ces limites, et que les idées transcendentales lui sont tout aussi naturelles que les catégories à l'entendement, avec cette différence seulement que, tandis que les dernières conduisent à la vérité, c'est-à-dire à l'accord de nos concepts avec l'objet, les premières ne produisent qu'une apparence, mais une apparence inévitable, qu'on peut à peine, à l'aide de la critique la plus rigoureuse, empêcher de nous abuser. ... En effet, ce n'est pas l'idée en elle-même, mais seulement son usage qui peut être, par rapport à l'ensemble de l'expérience possible, transcendant ou immanent, ...

24) Vgl. (V(5)23).

25)Kant „Kritik der reinen Vernunft" 1.Aufl. Vorrede: Werke. Akademie-Textausgabe(V(5)23). Bd.4. S.7(Original. S.VII-VIII).

Die menschliche Vernunft hat das besondere Schicksal in einer Gattung ihrer Erkenntnisse: daß sie durch Fragen belästigt wird, die sie nicht abweisen kann, denn sie sind ihr durch die Natur der Vernunft selbst aufgegeben, die sie aber auch nicht beantworten kann, denn sie übersteigen alles Vermögen der menschlichen Vernunft. ... (S.VII/S.VIII) ... ...

Der Kampfplatz dieser endlosen Streitigkeiten heißt nun Metaphysik.

Vgl. Kant „Critique de la raison pure": OEuvres(V(5)23). S.725f.(Préface de la première édition. VII-VIII).

La raison humaine a cette destinée particulière, dans un genre de ses connaissances, d'être accablée de questions qu'elle ne peut écarter; car elles lui sont proposées par la nature de la raison elle-même, mais elle ne peut non plus y répondre, car elles dépassent tout pouvoir de la raison humaine. ... Le champ (S.725/S.726) de bataille de ces combats sans fin, voilà ce qu'on nomme Métaphysique.

26)Takahashi, Katsumi: Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und

Mit dem ästhetischen Theile der kritischen Philosophie such' ich vorzüglich vertraut zu werden.

Vgl. Lettre de Hölderlin à Hegel (le 10 juillet 1794): OEuvres(V(5)2). S.314-316(Traduction par Naville, Denise).

Waltershausen, près Meiningen, le 10 juillet 1794. Cher frère, Je suis sûr que tu as parfois pensé à moi depuis que nous nous sommes quittés sur ce mot de ralliement — Royaume de Dieu! À ce mot de ralliement nous nous reconnaîtrions, je crois, après n'importe quelle métamorphose. (S. 314//S.316) ... Mes occupations sont maintenant assez concentrées. Kant et les Grecs sont à peu près ma seule lecture. J'essaie surtout de me familiariser avec la partie esthétique de la philosophie critique. ...

13) Vgl. (V(5)12).

14)Hegels Brief an Schelling vom Januar 1795: Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe. Bd.7. 2. S.19.

Hölderlin schreibt mir zuweilen aus Jena, ... , und sein Interesse für weltbürgerliche Ideen nimmt, wie mirs scheint, immer zu. Das Reich Gottes komme und unsere Hände seyen nicht müßig im Schoose!

15) Vgl. (V(5)12).

16)Novum Testamentum graece et latine. Stuttgart (Württembergische Bibelanstalt) 1930. S.85: Secvndvm Marcvm. 1. 15.

ὁ καιρὸς ... ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ·

Postquam autem traditus est Ioannes, venit Iesus in Galilaeam, praedicans Evangelium regni Dei, et dicens: (1.14/15) Quoniam impletum est tempus, et appropinquavit regnum Dei: poenitemini, et credite Evangelio.

17)Böckmann, Paul „Formensprache"(Hamburg 1966) S.330-344; Die deutsche Lyrik. Hrsg. v. Wiese, B. Düsseldorf (August Bagel) 1956. S.398-413: Das Bild der Nacht in Hölderlins „Brod und Wein".

18) Vgl. (V(5)2).

19)Augustinus „Confessiones" XIII. 38: Bibliotheca Teubneriana. Stuttgart (Teubner) 1934(1.Aufl.). 2.Aufl.1969. S.371.

nos requieturos in tua grandi sanctificatione speramus. tu autem bonum nullo indigens bono semper quietus es, quoniam tua quies tu ipse es.

20)Nietzsche: Kritische Gesamtausgabe(V(5)1). 3.Abt. Bd.1. 1972. S.17.

DIE / GEBURT DER TRAGÖDIE / AUS DEM / GEISTE DER MUSIK. ... LEIPZIG. / VERLAG VON E.W. FRITZSCH. / 1872.

21)Hölderlin „Deutscher Gesang" V.15-20: Stuttgarter Ausgabe. Bd.2. S.202.

dann sizt im tiefen Schatten, 15
Wenn über dem Haupt die Ulme säuselt,
Am kühlathnenden Bache der deutsche Dichter
Und singt, wenn er des heiligen nüchternen Wassers
Genug getrunken, fernhin lauschend in die Stille,
Den Seelengesang. 20

Vgl. Hölderlin „Chant allemand"(Traduction par Fédier, François) vers 15-20: OEuvres(V(5)2). S.883.

alors est assis dans l'ombre profonde, 15
Quand par-dessus la tête l'orme murmure,
Au ruisseau qui exhale la fraîcheur, le poète allemand
Et chante, quand il a de l'eau saintement sobre
Assez bu, écoutant au loin dans le calme,
Le chant de l'âme. 20
Et encore, encore est-il de l'esprit trop empli,
Et l'âme pure

V(5)9-12

Vgl. Hölderlin „Le Pain et le vin"(V(5)2) vers 119-124: OEuvres. S.813.

... Mais jusqu'au jour de leur venue,
Le sommeil souvent me paraît moins lourd que cette veille 120
Sans compagnon, cette fiévreuse attente... Ah! que dire encor? Que faire?
Je ne sais plus, — et pourquoi, dans ce temps d'ombre misérable, des poètes?
Mais ils sont, nous dis-tu, pareils aux saints prêtres du dieu des vignes,
Vaguant de terre en terre au long de la nuit sainte.

10)Hölderlin „Brod und Wein" Str.4. V.55-65: Stuttgarter Ausgabe. Bd.2. S.91(V.55-56)/S.92(V.57-65).

Seeliges Griechenland! du Haus der Himmlischen alle, 55
Also ist wahr, was einst wir in der Jugend gehört?
Festlicher Saal! der Boden ist Meer! und Tische die Berge,
Wahrlich zu einzigem Brauche vor Alters gebaut!
Aber die Thronen, wo? die Tempel, und wo die Gefäße,
Wo mit Nectar gefüllt, Göttern zu Lust der Gesang? 60
Wo, wo leuchten sie denn, die fernhintreffenden Sprüche?
Delphi schlummert und wo tönet das große Geschik?
Wo ist das schnelle? wo brichts, allgegenwärtigen Glüks voll
Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?
Vater Aether! ... 65

Vgl. Hölderlin „Le Pain et le vin"(V(5)2) vers 55-65: OEuvres. S.810.

Ô Grèce bienheureuse! Ô toi, demeure à tous les dieux donnée, 55
Quoi! c'est donc vrai, ce qu'en notre jeunesse un jour nous entendîmes?
Ô salle des festins! Ton sol? Mais c'est la mer! Tes tables? Les montagnes
Jadis à cette seule fin bâties, en vérité.
Mais les trônes, où sont-ils donc? Les temples? Où, les urnes
De nectar, et le chant qui doit réjouir le coeur des dieux? 60
Où brillent-ils, où donc, les oracles frappant au loin comme l'éclair?
Delphes dort, et la voix du grand Destin, où sonne-t-elle?
Où le dieu prompt? Lourd d'un universel bonheur, où, de quels cieux en fête
Jalli, frappe-t-il les regards de sa splendeur tonnante?
Éther, ô Père! ... 65

11)Hölderlin „Reflexion": Stuttgarter Ausgabe. Bd.4. S.233.

Man kann auch in die Höhe fallen, so wie in die Tiefe. Das leztere verhindert der elastische Geist, das erstere die Schwerkraft, die in nüchternem Besinnen liegt. ...

Vgl. Hölderlin „Réflexion"(Traduction par Naville, Denise): OEuvres(V(5)2). S.605.

On peut tomber dans l'altitude, comme dans la profondeur. L'élasticité de l'esprit empêche cette chute-ci, la force de gravité propre à la sobre réflexion prévient celle-là. ...

Vgl. „Reflexion" S.233 / „Réflexion" S.605:

Da wo die Nüchternheit dich verläßt, da ist die Gränze deiner Begeisterung. ... / Là où la sobriété t'ababdonne, là est la limite de ton enthousiasme. ...

b)„REICH GOTTES"

12)Hölderlins Brief 84 an Hegel vom 10. Juli 1794: Stuttgarter Ausgabe. Bd.6. S.126f./S.128.

Waltershausen bei Meinungen. d. 10 Jul. 1794. Lieber Bruder! Ich bin gewis, daß Du indessen zuweilen meiner gedachtest, seit wir mit der Loosung — Reich Gottes! von einander schieden. An die- (S.126/S.127) ser Loosung würden wir uns nach jeder Metamorphose, wie ich glaube, wiedererkennen. ... (S.127/S.128) ... Meine Beschäftigung ist jezt ziemlich konzentrirt. Kant und die Griechen sind beinahe meine einzige Lectüre.

Mystérieusement paraître; et la fervente, la Nuit vient, 15
Peuplée d'étoiles, et tout indifférente à notre vie;
La Donneuse d'émerveillements, l'Étrangère parmi les hommes
Aux cimes des monts là-bas s'éploie et brille dans sa mélancolique magnificence.

3)Unger, Richard: Hölderlin's Major Poetry. The Dialectics of Unity. Bloomington (Indiana Univ. Press) 1975. S.70.

... bells and cries of watchmen enforce their awareness of time's divisions and its transiency. These sounds thus induce authentic consciousnes of temporality.

4)Schmidt, Jochen: Hölderlins Elegie „Brod und Wein". Berlin (Gruyter) 1968. S.35.

... , bleibt der Wertbereich des geschäftigen Lebens doch abgegrenzt gegen den des hohen, geistesinnigen Lebens, ist beschränkt, nocht nicht von tiefstem Daseinssinn erfüllt. Später wird im Gedicht nicht mehr von den „Freuden des Tags", sondern von der ganz anders gearteten dionysischen Freude in nächtlicher Zeit die Rede sein. ... und doch viel tieferes Symbol unseres Daseins ist als die Gegenstände, denen unsere Aufmerksamkeit während der hellen Stunden gilt: das Abbild des Lebens selbst, der „immerquillende" Brunnen, welcher vom steten Werden und vom steten Vergehen spricht; die Glocken, deren Tönen den großen Puls der Zeit erfühlen läßt. — Zwei Hauptmotive der romantischen Poesie, das der Ferne und das des Verfließens der Zeit, sind in der zweiten Distichentrias in seltener Reinheit verkörpert. ...

5)Brentano, Clemens „Aus einem Tagebuchbrief für Luise Hensel"(Dezember 1816: Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe(V(5)2). Bd.7. 2. S.434.

Sind die ersten sechs Verse nicht das weltliche Treiben ins Reale bis zur Ermüdung, die folgenden sechs nicht die Sehnsucht der Zeit und das Gefühl der Verlorenheit. Tritt im siebten Vers nicht der Rückblick zur verlorenen Unschuld ein, und sprechen die immer quillenden Brunnen nicht von dem ewigen Quell der Verheißung, an dem die Gerechten sich laben? Mahnt diese die Glocke nicht durch die den Klang verhüllende Welt zu harren und zu beten, und rufet der Wächter nicht die Erfüllung der Zeit aus?

6)Schmidt: Hölderlins Elegie „Brod und Wein"(V(5)4). S.53. Vgl. V(5)53.

Indem der Dichter sich durch die Kraft der Erinnerung, der Mnemosyne, das Leben göttlich erfüllter Vergangenheit vergegenwärtigt, sich mit den hohen, begeisternden Gestalten der alten Helden, Halbgötter und Dichter umgibt, rettet er sich vor der leben- und sinnzerstörenden Macht der jetzigen Zeit. ...

7)Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin — „Seeliges Griechenland" (Forschungsberichte der Universität Kôchi für die Jahre 1984, 1985 und 1986. Vol.33, Vol.34 und Vol 35. Geisteswissenschaften. S.13-72/S.1-72/S.1-66.

8)Takahashi, Katsumi: Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein": ‚Heilige Nacht'. 5 Teile (Forschungsberichte der Universität Kôchi für die Jahre 1985/1986/1987/1988/1989. Vol.34/Vol.35/Vol.36/Vol.37/Vol. 38. Geisteswissenschaften. S.155-201/S.67-102/S.15-42/S.1-90/S.1ff.)

9)Hölderlin „Brod und Wein" Str.7. V.119-124: Stuttgarter Ausgabe. Bd.2. S.94.

... Indessen dünket mir öfters
Besser zu schlafen, wie so ohne Genossen zu seyn, 120
So zu harren und was zu thun indeß und zu sagen,
Weiß ich nicht und wozu Dichter in dürftiger Zeit?
Aber sie sind, sagst du, wie des Weingotts heilige Priester,
Welche von Lande zu Land zogen in heiliger Nacht.

QUELLENNACHWEIS V(5)1-2

〔V〕 VON DER ABENDDÄMMERUNG ZUR HEILIGEN NACHT

(5) Eleusis

a)„TRAURIG UND PRÄCHTIG"

1)Nietzsche „Also sprach Zarathustra"(1883-85) 4.Teil. 1885. XIX. Das Nachtwandler-Lied: Werke. Kritische Gesamtausgabe. Berlin (Gruyter) 6.Abt. Bd.1. 1968. S.400.

Oh Mensch! Gieb Acht!
Was spricht die tiefe Mitternacht?
„Ich schlief, ich schlief — ,
„Aus tiefem Traum bin ich erwacht: —
„Die Welt ist tief, 5
„Und tiefer als der Tag gedacht.
„Tief ist ihr Weh — ,
„Lust — tiefer noch als Herzeleid:
„Weh spricht: Vergeh!
„Doch alle Lust will Ewigkeit — , 10
„ — will tiefe, tiefe Ewigkeit!"

2)Hölderlin „Brod und Wein" Str.1. V.1-18: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe. Stuttgart (Kohlhammer) 1946-77 (Register 1985). Bd.2. S.90.

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
Und, mit Fakeln geschmükt, rauschen die Wagen hinweg.
Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,
Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt
Wohlzufrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen, 5
Und von Werken der Hand ruht der geschäfftige Markt.
Aber das Saitenspiel tönt fern aus Gärten; vieleicht, daß
Dort ein Liebendes spielt oder ein einsamer Mann
Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit; und die Brunnen
Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet. 10
Still in dämmriger Luft ertönen geläutete Gloken,
Und der Stunden gedenk rufet ein Wächter die Zahl.
Jezt auch kommet ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,
Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond
Kommet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht kommt, 15
Voll mit Sternen und wohl wenig bekümmert um uns,
Glänzt die Erstaunende dort, die Fremdlingin unter den Menschen
Über Gebirgeshöhn traurig und prächtig herauf.

Vgl. Hölderlin „Le Pain et le vin"(Traduction par Roud, Gustave) vers 1-18: OEuvres. Bibliothèque de la Pléiade. Vol.191. Paris (Gallimard) 1967. S.807(vers 1-2)/S.808(vers 3-18).

La ville autour de nous s'endort. La rue illuminée accueille le silence,
Et le bruit des voitures avec l'éclat des torches s'éloigne et meurt.
Rassasiés des plaisirs du jour, vers le repos s'en vont les hommes,
Et satisfait, songeur, un front penché soupèse
Pertes et gains. Dépouillé de ses fleurs, dépouillé de ses grappes, 5
Las du labeur de mille mains, désert, le marché dort.
Mais au coeur des jardins s'éveille et tremble une musique lointaine,
Là-bas joue un amant, qui sait? ou peut-être un homme saisi de solitude
Qui se souvient de ses amis perdus, de sa jeunesse, et dans l'arôme
Des parterres fleuris chantent les fraîches fontaines infatigables. 10
La voix des cloches vibre au calme crépuscule
Et le veilleur, gardien des heures, crie un nombre à pleine voix.
Oh! voici naître et frémir la brise aux feuilles extrêmes du bocage,
Regarde! et le fantôme de notre univers, al lune,

HÖLDERLIN'S "BREAD AND WINE"(V(5)85) IN OUTLINE

Round us the town is at rest; the street, in pale lamplight, grows quiet
  And, their torches ablaze, coaches rush through and away.
People go home to rest, replete with the day and its pleasures,
  There to weigh up in their heads, pensive, the gain and the loss,
Finding the balance good; stripped bare now of grapes and of flowers, 5
  As of their hand-made goods, quiet the market stalls lie.
But faint music of strings comes drifting from gardens; it could be
  Someone in love who plays there, could be a man all alone
Thinking of distant friends, the days of his youth; and the fountains,
  Ever welling and new, plash amid fragrance from beds. 10
Church-bells ring; every stroke hangs still in the quivering half-light
  And the watchman calls out, mindful, no less, of the hour.
Now a breeze rises too and ruffles the crests of the coppice,
  Look, and in secret our globe's shadowy image, the moon,
Slowly is rising too; and Night, the fantastical, comes now 15
  Full of stars and, I think, little concerned about us,
Night, the astonishing, there, the stranger to all that is human,
  Over the mountain-tops mournful and gleaming draws on.
    ... S.243/S.247

Where, then, where do they shine, the oracles winged for far targets?
  Delphi's asleep, and where now is great fate to be heard?
Where is the swift? And full of joy omnipresent, where does it
  Flash upon dazzled eyes, thundering fall from clear skies?
Father Aether! one cried, and tongue after tongue took it up then, 65
    ... S.247/S.249

Why no more does a god imprint on the brow of a mortal 105
  Struck, as by lightning, the mark, brand him, as once he would do?
Else he would come himself, assuming a shape that was human,
  And, consoling the guests, crowned and concluded the feast.
    ... S.249/S.251

... ... But meanwhile too often I think it's
  Better to sleep than to be friendless as we are, alone, 120
Always waiting, and what to do or to say in the meantime
  I don't know, and who wants poets at all in lean years?
But they are, you say, like those holy ones, priests of the wine-god
  Who in holy Night roamed from one place to the next.
    ...

When the Father had turned his face from the sight of us mortals
  And all over the earth, rightly, they started to mourn,
Lastly a Genius had come, dispensing heavenly comfort,
  He who proclaimed the Day's end, then himself went away, 130
Then, as a token that once they had been down here and once more would
  Come, the heavenly choir left a few presents behind,
    ... S.251/S.253

What of the children of God was foretold in the songs of the ancients,
  Look, we are it, ourselves; fruit of Hesperia it is! 150
Strictly it has come true, fulfilled as in men by a marvel,
  Let those who have seen it believe! Much, however, occurs,
Nothing succeeds, because we are heartless, mere shadows until our
  Father Aether, made known, recognized, fathers us all.
Meanwhile, though, to us shadows comes the Son of the Highest, 155
  Comes the Syrian and down into our gloom bears his torch.
Blissful, the wise men see it; in souls that were captive there gleams a
  Smile, and their eyes shall yet thaw in reponse to the light.
    ...

ELEUSIS
— On the lines 14-18 in Hölderlin's "Bread and Wine" —

Katsumi TAKAHASHI

ABSTRACT

In the first strophe of "Bread and Wine", Hölderlin describes a "holy Night", which resembles the "mysterious Night" in the "Hymns to the Night"(1800), for the "holy Night" is similarly "romanticized", as Novalis demands it: "The world must be romanticized. In this way, we find again the original sense. Romanticize is nothing but a qualitative potentializing."("Fragments" 1798) Already, the first line of Hölderlin's poem is typical of a "romanticized" image of the crepuscular town:

Round us the town is at rest; the street, in pale lamplight, grows quiet
("Bread and Wine" 1800-1801, translated by M. Hamburger)

In the original, there is not only the "pale lamplight", but also the inconspicuous moonlight: "die erleuchtete Gasse"(the illuminated lane). Beethoven's Moonlight Sonata is of the same kind. Both of them unite the inner light with the quiet moonlight, like a sort of Eleusinian mysteries.

Although the moonlight illuminates the whole town in the beginning of the poem, it remains almost unnoticed. It is only intimated with Hölderlin, just "like a peaceful God on obscure clouds, / Acting secretly over his world"("Emilia before her Bridal" 1799. 11.29-30). No mention is made of the moon till the line 13. Finally, it shows itself in the line 14, although, first in the "shadowy image", i.e., not in any bright form:

Look, and in secret our globe's shadowy image, the moon,
Slowly is rising too; and Night, the fantastical, comes now 15
("Bread and Wine", trans. by Hamburger)

The "moon"(1.14) remains so "in secret". In such a manner, Christ comes out also in lines 129-130 of "Bread and Wine": "Lastly a Genius had come, dispensing heavenly comfort, / He who proclaimed the Day's end, then himself went away"(tr. by Hamburger). The Mediator stands in the middle of light and shade, namely in the chiaroscuro nuance between the Olympian "Day"(1.130) and the Hesperian Night. In a modest way, he throws a bridge across the abyss between the hereafter of the "blest Greece"(1.55) and this world in "lean years"(1.122) of the Christian "Hesperia"(1.150).

Similarly, the "romanticized" moonlight in the first strophe mediates also between the other world of the "mysterious Night" and the here and now of the town in its historical reality around the year 1800. This artifice elevates the "romanticized" sentiment and moreover transfigures the civic daily life of the town. Therewith, the everyday life tends to a "moral greatness", which is clearly connected with Schiller's enlightened interpretation of the ancient mysteries. By way of illustration, we can give his "Civic Song"(1799), in the climax of which, Demeter, the goddess of corn, sits enthroned in Eleusis and lets the mankind show a secret:

And only by means of its morals, 207
It can be free and mighty.
("Civic Song": later "The Eleusinian Feast" 1800. Strophe 26)

In conformity with such an "open field of the consciousness", Hegel considers the classic Greece as the "Realm of morals", that is still illustrated for us in the "Eleusinian Relief"(first excavated in 1859) among other ancient relics of the fifth century before Christ.

ÉLEUSIS
— Sur les vers 14-18 dans «Le Pain et le vin» de Hölderlin —

Katsumi TAKAHASHI

SOMMAIRE

C'est une «Nuit sacrée» qui commence «Le Pain et le vin» de Hölderlin. Elle ressemble à la «Nuit mystérieuse»(V(5)72) dans les «Hymnes à la Nuit»(1800), car elle est aussi «romancisée» que Novalis l'éxige: «Le monde doit être romancisé. C'est ainsi qu'on trouve de nouveau le sens originel. Romanciser, ce n'est qu'une potentialisation qualitative.» («Fragments» 1798: V(5)68). Quant à la «Nuit» de Hölderlin, nous trouvons cette «potentialisation» déjà au début du poème:

La ville autour de nous s'endort. La rue illuminée accueille le silence,
(«Le Pain et le vin» 1800-01, vers 1: V(5)18)

Voici une ambiance romantique qui se fait valoir dans la traduction anglaise de Hamburger(V(5)85): «la rue, à la lumière faible des lampes» (the street, in pale lamplight)。Mais à la fois, nous y regardons déjà «la lune mystérieusement paraître»(vers 14-15); elle répand sa lumière douce sur toute la ville sans être frappante. Il en est de même pour la sonate de «Clair de lune» de Beethoven; l'intérieur et l'univers vont bien ensemble dans cette «illumination» des lampes et de la lune. On se dirait dans une sorte des mystères éleusiniens.

La lune reste presque inaperçue, quoique ayant paru au début du poème; le poète n'en parle que par allusions. C'est comme si elle était «un paisible Dieu au-dessus des nuages obscurs qui règne secrètement sur son monde»(V(5)45). Jusqu'au vers 13, elle n'est pas mentionée. À la fin, elle s'avance dans le vers 14, et cependant elle n'est pas un corps lumineux; elle est un «fantôme de notre univers»:

Regarde! et le fantôme de notre univers, la lune,
Mystérieusement paraître; et la fervente, la Nuit vient, 15
(«Le Pain et le vin», vers 14-15: V(5)22)

C'est aussi Jésus-Christ comme «un paisible Génie»(vers 129) qui a cette forme de «paraître mystérieusement». Il se situe au clair-obscur entre le Jour des dieux grecs et la Nuit européenne. Son essence existe dans l'intervalle de l'autre monde et de cette terre, en d'autres mots, entre la «Grèce bienheureuse»(vers 55) et «ce temps d'ombre misérable»(vers 122) de l'«Hespérie»(vers 150) chrétienne.

Il en va de même de la lune «romancisée» au début du poème. Elle s'entremet dans l'intervalle entre la «nuit mystérieuse» et la ville actuelle qui est conforme à la réalité historique vers 1800. D'un coté cet artifice élève le sentiment «romancisé» et de l'autre coté il transfigure la vie quotidienne de la ville. Il en résulte que la vie civile tend à une «grandeur morale»(V(5)93) qui a certainement rapport avec l'interprétation éclairée de Schiller sur les mystères antiques. En est la preuve son «Chant des Citoyens»(1799) qui s'appelle «La Fête éleusinienne»(1800) après le changement de titre. Au sommet du chant, Déméter, la déesse-mère éleusinienne de la fécondité, révèle à l'homme le secret des mystères:

Et seulement par sa morale
Il peut être libre et puissant.
(«Chant des Citoyens»; «La Fête éleusinienne», vers 207-208: V(5)94)

Sur un tel «champ ouvert de la conscience», Hegel se fonde pour considérer la Grèce classique comme le «Royaume de la morale»(V(5)99). Ce royaume se fait saisir encore aujourd'hui par le «Relief éleusinien»(V(5)78) du Ve siècle A.C. qu'on a fouillé 1859 pour la première fois.

ELEUSIS
— Über die V.14-18 in Hölderlins „Brod und Wein" —

Katsumi TAKAHASHI

ZUSAMMENFASSUNG

In der ersten Strophe von „Brod und Wein" wird eine „heilige Nacht" beschrieben, die der „geheimnisvollen Nacht" in den „Hymnen an die Nacht" (V(5)72) von 1800 gleicht, da sie ähnlich „romantisiert" wurde, wie es Novalis verlangt: „Die Welt muß romantisiert werden. So findet man den ursprünglichen Sinn wieder. Romantisieren ist nichts als eine qualitative Potenzierung。 ... Indem ich dem Gemeinen einen hohen Sinn, dem Gewöhnlichen ein geheimnisvolles Ansehn, dem Bekannten die Würde des Unbekannten, dem Endlichen einen unendlichen Schein gebe, so romantisiere ich es" („Fragmente" 1798: V(4)68). In „Brod und Wein" findet sich schon im V.1 ein typisch „romantisiertes" Stadtbild:

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
(„Brod und Wein" 1800-01. Str.1。 V.1: V(5)18)

Diese „Erleuchtung" entsteht, indem der „Mondschein" mit dem „bleichen Lampenlicht" in eins verfließt, was etwa in Hamburgers englischer Übersetzung („the street, in pale lamplight, grows quiet") nicht mehr zum Ausdruck kommt。 Ähnlich wie in Beethovens Mondscheinsonate geht es hier um ein Einheitserlebnis, eine Verschmelzung vom Innenraum der Seele mit dem Außenraum der in die Natur eingebetteten Stadt, ja gleichsam um eine Art von Eleusischen Mysterien.

Obwohl der „Mondschein" schon im Anfang des Gedichtes da ist, verbleibt er fast unbemerkt。 Er wird nur angedeutet, so als wäre er „wie ein stiller Gott auf dunkler Wolke, / Verborgenwirkend über seiner Welt"(V(5)45). Bis zum V.13 wird der Mond nicht erwähnt. Erst im V.14 tritt er hervor, doch zunächst als „Schattenbild", d.h。 nicht als Lichtgestalt:

Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond
Kommet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht kommt,
(„Brod und Wein" Str.1. V。14-15: V(5)22)

Er verbleibt so geheim. Derart „verborgenwirkend" erscheint auch Christus in „Brod und Wein", als „ein stiller Genius"(V.129) im nuancenreichen Helldunkel zwischen dem griechischen Göttertag und der hesperischen Nacht. Er erscheint also als Vermittler zwischen dem jenseitigen „seeligen Griechenland"(V.55) und der diesseitigen „dürftigen Zeit"(V。122) der christlichen „Hesperien"(V.150).

Ähnlich vermittelt auch der „romantisierte" Mondschein in der ersten Strophe zwischen der jenseitigen „geheimnisvollen Nacht" und dem diesseitigen Stadtbild von 1800 in seiner historischen Wirklichkeit. Dieser Kunstgriff steigert einerseits das „romantische" Gefühl der Sehnsucht nach dem unendlichen Geheimnis; andererseits verklärt er aber auch das bürgerliche Alltagsleben der Stadt. Damit wird das alltägliche Leben in eine „sittliche Größe"(V(5)93) eingespannt, die sicherlich mit Schillers aufklärerischer Auffassung von den Mysterien der Antike zusammenhängt. Man denke nur an sein „Bürgerlied"(1799), das später in „Das Eleusische Fest"(1800) umbenannt wird, in dessen Höhepunkt Demeter, die in Eleusis thronende Göttin der Fruchtbarkeit, dem Menschen das Geheimnis der Mysterien offenbart: „Und allein durch seine Sitte / Kann er frei und mächtig seyn。"(Str。26. V.207-8: V(5)94). Aufgrund eines derart „offenen Felds des Bewußtseins"(V(5)80) erklärt auch Hegel das klassische Griechentum für das „Reich der Sittlichkeit"(V(5)99), das uns heute noch das erst 1859 aufgedeckte „Eleusische Relief"(V(5)78) aus dem 5. Jahrhundert v. Chr. veranschaulicht。

〔IV〕„EIN SINNIGES HAUPT"(Neufassung) : «SONGEUR, UN FRONT PENCHÉ»(Édition revue) : "A THOUGHTFUL HEAD"(Revised edition) (XXXVIII. II. 44-57)

LANDAUER — „ein sinniges Haupt" in Hölderlins „Brod und Wein" (Deutsche Neufassung) (XXXVIII. II. 83-90)

〔V〕VON DER ABENDDÄMMERUNG ZUR HEILIGEN NACHT : DU CRÉPUSCULE DU SOIR À LA NUIT SACRÉE : FROM THE EVENING TWILIGHT TO THE HOLY NIGHT

(1) „Abgeschiedenheit" : «Renonciation» : "Renouncement" (XXXVI. 16-21)

(2) „Brunnen" : «Fontaines» : "Fountains" (XXXVI. 21-27)

(3) „Gloken" und „Stunden" : «La voix des cloches» et «le veilleur, gardien des heures» : "Church-bells" and "the watchman calling out of the hour" (XXXVII. 2-8)

(4) „Hain" und „Bund" : «Bocage» et «Alliance» : "Grove" and "Covenant" (XXXVIII. II. 92-123)

(5) Eleusis : Éleusis : Eleusis (XXXIX. 2-20)

a)„Traurig und prächtig" : «Mélancolique magnificence» : "Mournful and gleaming"
b)„Reich Gottes" : «Royaume de Dieu» : "Kingdom of Heaven"
c)„Mondnacht" : «Nuit» à clair de «Lune» : "Moonlight Night"
d)„Sternen" : «Étoiles» : "Stars"
e)„Das Ideal und das Leben" : «L'Idéal et la Vie» : "The Ideal and the Life"
f)„Heilige Nacht" : «Nuit sacrée» : "Holy Night"
g)„Suchen" und „Prüfen" : «Chercher» et «examiner» : "Seek" and "examine"
h)„Anschaun" und „Suchen" : «Contempler» et «chercher» : "Contemplate" and "seek"
i)„Romantisieren" : «Romanciser» : "Romanticize"
j)„Sittlichkeit" : «Moeurs» : "Mores"

〔VI〕SCHLUSS : CONCLUSION : CONCLUSION

— Von der Aufklärung zum 19. Jahrhundert : De l'âge des lumières au XIXe siècle : From the Enlightenment to the 19th century —

Zusammenfassung / Sommaire / Abstract
INHALT / TABLE DES MATIÈRES / CONTENTS

HÖLDERLINS „BROD UND WEIN". ERSTE STROPHE: 'HEILIGE NACHT' SECHSTER TEIL: „ELEUSIS"

«LE PAIN ET LE VIN» DE HÖLDERLIN. PREMIÈRE STROPHE: ‹NUIT SACRÉE› SIXIÈME PARTIE: «ÉLEUSIS»

HÖLDERLIN'S "BREAD AND WINE". FIRST STROPHE 'HOLY NIGHT' SIXTH PART: "ELEUSIS"

TAKAHASHI, Katsumi
(Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät)
(Section de Philologie allemande de la Faculté des Lettres)
(Seminar for German Philology of the Faculty of Arts)

FORSCHUNGSBERICHTE DER UNIVERSITÄT KÔCHI (Kôtzschi).
JAPAN 1990. VOL.39. GEISTESWISSENSCHAFTEN.
BULLETIN ANNUEL DE L'UNIVERSITÉ DE KÔCHI (Kôtchi).
JAPON 1990. TOME XXXIX. SCIENCES HUMAINES.
RESEARCH REPORTS OF KÔCHI UNIVERSITY.
JAPAN 1990. VOL.39. HUMANITIES.

INHALT : TABLE DES MATIÈRES : CONTENTS

* DAS STADTBILD IM ANFANG VON „BROD UND WEIN" : L'IMAGE DE LA VILLE AU DÉBUT DU POÈME «LE PAIN ET LE VIN» : THE IMAGE OF THE TOWN IN THE OPENING OF "BREAD AND WINE" (XXXII. 21-64)

〔I〕 EINLEITUNG : INTRODUCTION : INTRODUCTION (XXXIV. 156-159)

* „Romantisieren" und „Idealisieren" : «Romanciser» et «Idéaliser» : "Romanticize" and "Idealize" (XXXVIII. II. 4-9)

〔II〕 „RINGS UM RUHET DIE STADT" : «LA VILLE AUTOUR DE NOUS S'ENDORT» : "ROUND US THE TOWN IS AT REST" (XXXIV. 160-169)

〔III〕 „ERLEUCHTUNG" UND „BELEUCHTUNG" : «LES LUMIÈRES AUX FENÊTRES» ET «L'ÉCLAT DES TORCHES» : "THE LIGHTS AT THE WINDOW" AND "THE GLITTER OF THE TORCHES" (XXXIV. 170-182)